

Title	古代イタリア都市ポンペイの発掘・学術調査15年：考古学的資料からみた産業と交易：海のシルクロード
Sub Title	Fifteen years of excavation and research in the ancient city of Pompeii : industry and trade as revealed by archaeological materials: a seaborne Silk Road
Author	浅香, 正(Asaka, Tadashi)
Publisher	三田史学会
Publication year	2009
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.77, No.4 (2009. 3) ,p.27(395)- 71(439)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	講演録
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20090300-0027

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

古代イタリア都市ポンペイの発掘・学術調査15年

— 考古学的資料からみた産業と交易…海のシルクロード —

浅香 正

只今、御紹介をいただきました同志社大学の浅香でございます。慶應義塾大学で講演をさせていただく機会を賜り、大変うれしく、かつ光栄に存じております。

ポンペイはご存じのとおり紀元後七九年八月二十四日午後一時頃、ウエスウィウス火山の噴火により一兩日中にはほぼ完全に埋没しました。五〜八メートルくらいの火山堆積物がたまつたため、おそらく上からは何も見えなくなつただろうと思われれます。噴火の当初は、高層の建築物の一部が堆積物から突出していたものの、長年の間に無くなり、現在の状態に至りました。本日は講演資料(四三頁以下)に従つて最初に、ポンペイという街がどのように出来てきたかを簡単に申し上げます。

まずイタリア都市ポンペイの起源と発展であります、

ポンペイ都市の起源に関して長い研究史があり、それについてここで詳述いたす余裕はありません。一九三〇年代にポンペイ都市は二段階にわけて成立し、最初はまだ旧都市 *Altstadt* と呼ばれる旧市街が城壁に囲まれ、前五世紀になって現在みられる城壁に囲まれた新都市 *Neue Stadt* に拡大したという説がありました。しかし二〇世紀になってデ・カーロという研究者により、現在みられる城壁が前六世紀初頭既に *パツパモンテ* と呼ばれる柔らかい凝灰岩によって構築されていたことが明らかにされ、都市の成立は前六世紀に遡り、新都市という段階は存在せず、その古い地域はポンペイ都市の中心地であつたと、また、前六世紀に成立したポンペイの建設は、既に前八世紀中頃ナポリ湾岸に進出していたギリシア人によ

るものか、あるいはローマ人などの住んでいたラティウム地方を越え、前七世紀の中頃カンパニア地方に進出したエトルスキ人によるものか、これら両民族あるいはそれらの文化のいずれかによってポンペイが成立したという見解が展開されてきました。しかし最近の傾向では、恐らく五つの土着のオスキ人の集落が集住によって都市の基礎をつくり、むしろ内陸から進出してきたエトルスキ人の主導のもとにポンペイが成立したと考える説が有力なようであります。⁽¹⁾

前六世紀頃に成立したポンペイはエトルスキ人の影響下にありましたが、エトルスキ人は前四七四年クマエ沖の海戦でシユラクサエの僭主の率いるギリシア勢力に破れ、エトルスキ人はカンパニア地方から後退しました。カンパニア地方に政治的空白が出現したとき、カンパニアの山間部に蟠踞していたサムニウム人がカンパニアの平野部に進出、前四二〇年ポンペイもサムニウム人の支配下に入りました。配布資料(四三頁以下) I(4)に示したごとく、やがてローマはカンパニア地方に進出してきました。したが、ポンペイは前八〇年ローマ植民都市となるまでサムニウム人の都市だったのです。それから前七九年ウエスウィウス火山による埋没までローマ都市として繁

栄いたしました。

また最近における火山学の発達により、ポンペイにおいて人間はいつ、どのようにして死んだか、という問題が活発に論議されるようになりました。アメリカの火山学者H・H・シガードソンの研究によれば、⁽²⁾人骨の出土層は火山堆積物の最下層からではなかったのです。噴火は後七九年八月二四日午後一時頃からおこり、まず白及び灰色の軽石層が二四〇センチメートル程堆積し、ついで二五日午前一時頃から火砕流が発生、第一―三次火砕流はポンペイの城壁外でとどまりましたが、午前七時三〇分頃第四次火砕流が城壁を乗り越え、とくに第六次火砕流によってポンペイは破滅的打撃を受けました。この火砕流が人間に対していかに大きな打撃を与えたかは、一九九一年六月三日九州の雲仙・普賢岳において四三人の死者を出したことによっても理解されます。

次に人々の記憶から長い間忘れ去られていたポンペイがようやく正式に発掘されたのは一七四八年からであります。しかしブルボン王朝下の発掘は要するに宝探しに過ぎず、学術的な発掘が開始されたのは一八六一年新生イタリア王国が誕生し、国王ヴィットリオ・エマヌエーレ二世が監督官に任命したジュゼッペ・フィオレツリに

よるものであります。それ以降ポンペイは考古学の女王としてイタリアはもちろんのことヨーロッパの各国、さらにはアジアの地域からの発掘調査隊も参加し、一九九三年からはわたくしたち古代学研究所の日本隊も参加することになりました。

次にポンペイ遺跡の現状(Ⅲ)であります。全体の遺跡は資料付図(Ⅰ)ポンペイ市街地図をご覧ください。大きく存じます。城壁内の総面積は六三ヘクタールで、1/5は未発掘であります。城壁は三・二キロメートル、城門は七、塔は十二ございます。考古学上都市は九の地区 *regio*、一〇九の街区 *insula*、家屋 *casa* (戸口番号は全体で一二六一ありますが、一つの住宅には複数の戸口があり、家屋総数ではありません) に区分されています。よく知られている「ファウヌスの家」*Casa di Fauno* はこの区分法に従い VI, 12, 25 と表示されます。すなわち第VI地区、第12街区、家屋番号2-5ということになります。

現在の調査で、ポンペイに人間がどれだけ住んでいたか、どれだけの家があったかというのは当然問題になってまいります。おそらく住民の人口は一人前後、噴火

によって死んだ人間の数は全く推定になりませんが、人骨の数などから私の調べた範囲では大体一〇四四人、我がが発掘した二体の遺体を加えますと、一〇四六人ということになるわけです。概算で言いますと全体の一割強の人が亡くなったということです。家の数も正確な数字を出すのは非常に難しいのですが、大体八〇〇〜一〇〇〇くらいの家があったのではないかと思われれます。

次にポンペイ市内における主要建造物(Ⅳ)に移ります。建造物は大別して三つに分類されます。

(Ⅰ) 公共建造物

(a) 行政上の建造物 広場 *フォルム* (政治・経済・社会・宗教など市民生活の中心)、*バシリカ* (市場、裁判などに利用)、行政役所、*マケツルム* (肉市場)

(b) 宗教上の建造物 神殿・*アポッロ* 神殿、*アテナ* (あるいは *ミネルウア*) 及び *ヘラクレス* の *ドリリス* (三角広場の) 神殿、*ユッピテル* 神殿、*ラレース* (国家及び家庭の保護神) 神殿、*ウエヌス* 神殿、*フォルトゥナ*・*アウグスタ* 神殿、*ウエスパシアヌス* 神殿、*イシス* 神殿など

(c) 娯楽施設 公共浴場、円形闘技場、大劇場及び小劇場 (*オデオン*)、体育訓練場 (*パラエストラ*) など

(II) 商工業用の建造物

旅館・居酒屋、売店・飲食店、立飲屋、パン屋、毛織物・縮絨工房、調味料（魚醬）工房など

(III) 住宅 domus

住宅も豪邸から下層民の共同住宅までその規模はさまざまでありますが、住宅の形式は最初イタリア型と呼ばれ、アトリウム（広間）を中心とした簡略なものでありましたが、前二世紀頃から東方ヘレニズム文化の影響を受けると住宅の後方にペリステリウムと呼ばれる周柱廊中庭が加えられ、屋敷が拡大、各部屋も立派になってまいりました（図版21―24）。各部屋や通路に描かれた壁面のフレスコ絵画の豪華さはポンペイ美術の大きな特色の一つであります。

次にフレスコ絵画に移らせていただきます。⁽³⁾ポンペイ遺跡の価値、重要性は建物だけでなくフレスコ絵画にも表れており、今日ポンペイ展が開かれる際にはこれらのフレスコ絵画が非常に大きな要素を占めるわけであります。このフレスコ絵画は、ブルボン王朝の時代に遺跡から王宮へ大量に運び去られ、現在も博物館内あるいはポンペイ監督局管轄の資料保存所の倉庫に保管されているものが多くあります。ですから遺跡の現場やポンペイ展

等で一般公開される数には制限があるというのが実状でございます。今日はそうしたフレスコ絵画を説明しようと思ひまして、配布資料に「V. 建築及び絵画様式」という項目（五四頁）を設けました。⁽⁴⁾第一の形式は被石様式、大理石の形をはめ込んだようにして漆喰に絵を描き込む方式であります。第二の様式は建築様式と申しまして、宮殿、王宮の立体構造を壁面に描いているものです。透視画法、遠近法による演出効果が施されております。いくつかの建物を継ぎ合わせたような不自然さはあるものの、非常に豪華な宮殿の形式がそこに描かれております。第二様式のもう一つの特徴としてメガログラフイアによる巨大人物像を描いた豪華な色彩豊かなフレスコ画がございます。

第三番目の様式では、建築様式がほとんどなくなって遠近法も用いられなくなりまして。そして壁面は下部、中間部、上部の三つに区分され、フラットな中間部の中央には主にギリシア・ローマの神話を、両脇の壁面には赤や黄色のきらびやかな単色の地に小さなタブロ絵が描かれます。ここでの一番大きな特色は、壁面を区画するものが第二様式の柱から細い燭台に変わったこととあります。そのため第三様式は燭台様式と呼ばれることがあります。

ます。また第三様式の最後の段階に静かな田園風景を描くフレスコ絵画が現れました。四番目の様式になりますと、第三様式の落ち着いた壁面とは対照的に、非常に技巧的になってまいります。建築自体もデザイン化されて、非常に幻想的な壁面の様相も出てきます。従って第四様式は装飾様式あるいは幻想化様式といわれています。この第四様式の時期に、ポンペイは噴火で埋もれてしまつたわけです。その後、埋もれてしまつたポンペイ以外の都市のフレスコ絵はどうなつたかという問題があります。これについては他のローマの市街でも、第四様式以降はそれほど立派なフレスコの絵が出てこないことからやはり絵画様式としては、ポンペイだけでなくローマ全体において、前述のような四つの様式の区分、段階が成り立つものとされております。これが市内の状態であります。以上でポンペイの都市の起源及び歴史的発展、ポンペイ遺跡の地誌的概観、さらにポンペイ遺跡に残っている美しいフレスコ絵画について概略を申し上げました。これらはポンペイを知るための基礎的知識であり、これから私の研究の本題に入らせていただきます。

以上は主としてポンペイ都市内のことですが、郊外は

テリトリウム *territorium* (都市領) と呼ばれ、そこには別荘 *villa*⁽⁵⁾ (ウィツラ) がございます。それらの別荘にはそれぞれの特徴を示す形容詞がついておりまして、一方には *villa rustica* (「農園別荘」という形態があり、そこは住居であると同時に農園を持ち、葡萄酒、オリブ油の製造が行われておりました。その種のウィツラのなかには、高級な住宅部分を備えた建物もあれば、農産物を加工するためだけの簡素な施設 (付図Ⅲ ヴィツラ―レジーナ荘) もありました。またその両方の機能を併せ持った「中間的な形式」の施設 (付図Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ ルキウスⅡカエキリウスⅡユクンドウス荘、テルツイーニョの諸荘) もありました。もう一方のウィツラの形式として、葡萄酒、オリブ油を製造する施設を持たない豪邸が挙げられます。そこは金持ちたちや皇帝の一族が生活するための文字通りの別荘でありました。これを私たちは「農園別荘」に対して *villa di otium* (「閑暇別荘」と呼んでおります。配布資料にその種の別荘の代表的なもの (ディオメデス荘、秘儀荘 (註4 壁画様式、図版2、3 参照)、オプロンティイスのポップエア荘) をあげておきました。後ほどスライドでお見せしたいと思います。

農園別荘はイタリアの人々にとって単なる住まいというだけではなく、生産のための施設という意味があります。古代社会においてはやはり農業が社会生活の一番の基盤であります。イタリアの場合は葡萄酒やオリーブ油を製造し、それを売ることで、別荘の所有者たちの裕福な生活が可能になっていたわけです。すでに当時から、農園別荘の効果的な経営方法について書いた本がごまます。これはカトー (234-149 B.C.) とワッロー (116-27 B.C.)、コルメッタ (後一世紀) という人物によつて、だいたい紀元前二世紀の後半から紀元後一世紀の前半にかけて、『農事記』という題で書かれています。その『農事記』の一部によりますと、ウィツラは三つの区分からなっているとあります。ひとつは *pars urbana* と呼ばれる住宅部分であります。二番目は *pars rustica* といひましてこれは主として奴隷の住居及び家畜を飼う施設を指します。三番目は *pars fructuaria* と申します生産部分でありまして、葡萄酒、オリーブ油を機械で搾り、発酵させる製造工程のための施設であります。

こうした別荘の施設区分は『農事記』のような文献に残されているというだけでなく、実際の遺跡の中にも見

ることができます (付図Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅸ、Ⅹをご覧下さい)。配布資料 (五三頁) に、ヴィツラーレツジーナという比較的小規模の農園別荘 (付図Ⅲ) (図版27、28) を載せておきました。ここは一九七八年から一九八〇年にかけてデ・カーロという考古学者が発掘した場所であります。同じページ (五三頁下段) にルキウスⅡカエキリウスⅡユクンドゥス荘 (付図Ⅳ) (図版29、30) がございます。これは先ほど申し上げました農園別荘のうち中間的な型、もつとも代表的な形式でして、カトーの『農事記』に書かれているようなウィツラが実際に発掘の結果出てきたというわけです。ここで「別荘 (ウィツラ)」とみられる建物が郊外の農村ではなくポンペイの街のなかにある場合は、同じ種類の建物であつても「の家 (カーサ)」と訳して区別をいたします。観光の方たちは農村の方へはお行きになる機会が少ないですけれども、今申し上げたヴィツラーレツジーナなどは一般に公開されている農園別荘でございます。観光バスのルートには入っておりませんが、ナポリからのガイドに指定すれば連れて行ってもらえると思います。

ついでⅦ古代学研究所の発掘調査に移ります。実は、

私が一九九五年に同志社大学を定年退職する五年前、古代学研究所の所長から「ポンペイを発掘したい。手伝ってくれないか。」とお声がかかりました。私は発掘を専門とする考古学者ではありませんので、「層を見たり、遺物を分類するといったことは、私はできませんよ。」と申し上げたところ、「そういう作業には専門家を連れて来るので問題はない。」ということでしたので、喜んでお手伝いさせていただくことになりました。すでに遺跡の調査というものは、ローマに留学していた時に経験しておりました。一回目は一九七七年ローマにありますアッカデミア・アメリカーナ・イン・ローマ Accademia Americana in Roma というアメリカの非常にすばらしい在外研究施設に約一年間留学しておりました。それから五年後一九八三年に、同じローマにあるスウェーデン古典学研究所 Istituto Svedese degli studi classici a Roma というところで、非常に親しくしていただいたスウェーデン人の先生の推薦で、約半年間勉強いたしました。それらの研究機関はローマに研究所を持ち、現地調査の機会を数多く設けておりました。もし日本人の研究者によってこのような施設が立ち上げられ、発掘調査ができるとしたら、これは大変ありがたいことであると、

当時そのような希望を抱いておりました。

六五歳からポンペイの調査を始めまして、七〇歳の定年から古代学研究所に勤務するようになりました。古代学研究所は一九九〇年に発掘調査を目的とする発掘申請書を監督局に提出いたしました。ところが、イタリアでの発掘の経験がないという理由で許可が下りなかったのであります。「イタリアで発掘の経験のない人間が、『考古学の女王』と呼ばれるポンペイ遺跡を発掘することは認められない。」と鎧袖一触、許可が出なかつたようです。そうは言っても、初めて日本から調査隊が来るというところでポンペイ監督局総監の方も譲歩してくれて、三年間の地上調査を認めてもらえることになりました。地上調査と申しますのは、現在ポンペイの遺跡が掘り起こされている紀元後七九年の層より上の面を対象とする調査であり、その許可を与える権限はポンペイ監督局総監が持つております。ところが発掘調査は、七九年のレベルより下を掘るものでして、これを行うにはより上級の監督庁である文化財省の許可が必要になります。そういうわけで三年間、地上調査をいたしまして報告書を提出いたしました。その三年目になった時に、お世話になっていた先生と監督局総監の計らいで、日本隊に発掘調査

の権限が与えられることになりました。調査の許可をもらった場所は、ポンペイの八つの城門のうち未だ完全には発掘されていない「カプア門」という城門でした。カプア門の位置は配布資料の五〇―五一頁、付図Iの「市街地図」の北側の城壁のところを示してあります。そこを発掘、調査して報告書を提出することになりました。

一九九三年から五年間、一九九八年までこのカプア門を目指して発掘をいたしました。しかし掘れども掘れども門は出てきませんでした。カプア門があると思われる場所から毎年少しずつ掘る範囲を広げましたが、延長一二〇メートルまで掘ったところで門は存在しないと判断するに至りました。五年間、ドイツからの調査隊がうらやむほど広い範囲を掘り続けた後、発掘調査を打ち切り、古代学研究所のポンペイ研究委員会に最終結論として、「カプア門はなかった。」という報告をいたしました。もし門があったなら、調査は二、三年間で終わっていたはずです。カプア門がなかったおかげで、二、三年で終わる調査を（最初の三年の地上調査を含めて）八年続ければ、その間私は遺跡を回って本日お話しするような課題を色々と考えてきたわけです。

最後の八年目の年に、ポンペイ研究委員会の一人から、これまで実際に掘った範囲を尋ねられたので、地図を示して説明をいたしました。すると「城壁の外側を掘ってみなくては本当に門がないとは言えないのではないか。」という意見が出てまいりました。これを聞いて私は心の中で、考古監督局の管轄外なので調査は困難と思いましたが、調査を行うようにという指示があり、これは仕方がないと判断いたし、二〇〇二年城壁の向こう側を28×11メートルの矩形の幅で掘ったわけでありました。もちろん城門は出てきませんでした。城門が構築される場所には実はいくつかの条件があります。城門に続く道にはたいてい溶岩でできた黒い石畳があります。またその石畳が城門を突き抜けた両側には、非常に立派なお墓がずらっと並んでいます。現地で学術調査をやった人間であれば、この城門と墓地との関係はすぐわかります。私は三年目くらいから気付いておりましたが、カプア門の場合、城門の形跡がなく外側には道路の痕跡もなく、当然その道の両脇のお墓もない。このような条件の整っていない城門というのはまず存在しないだろうと考えていたわけですが、研究所長が「掘ってみなければわからない。」とおっしゃるので、城壁北外側の発掘を行い

ました。

最終的に城門がないことがわかって、研究所の先生方もあきらめたわけですが、この外側を掘っている最中、予想外のことが起こったのであります。一月二六日地上から約七・五メートル掘ったところに人間の遺体、人骨が二体(図版31)出てまいりました。これは最近ポンペイから出土した人骨では一番新しい発見であります。翌日のヨーロッパの全新聞に、「日本調査隊、人骨を発見」という記事が載りました。それまで日本隊の活動が現地のマスコミに取り上げられるということなどなかったのですが、何が起こるか分からないものでももちろん日本の新聞でも報道されました。それで新聞社が共同記者会見を開いて話を聞かせてほしいというので、「京都大学に記者クラブがあるからそこでやりましょう。」ということになりました。そこで京都に支局のあるすべての新聞社の方々がお見えになり、私と所長が会見に出席しました。遺体が二体出てきたということは大変なことで、その遺体も後ほどスライドでお見せいたします。

出土した二体の人骨のうち、一方には足枷がはめられ、男性で、他の一体は女性であると判断されました。わた

くしたちはこれらを石膏で固めました(図版32)。奴隷の足にはめられていた鉄(足枷)は、ポンペイの考古監督局に保管されています。それからバックル、腕輪、指輪も出てまいりました。その後京都大学の古人骨学の世界的権威、片山教授が調査した結果、二つの遺体は男女ではなく、ともに男性であるとわかりました。年齢もきちんと推定され、日本の人骨学のレベルの高さが実証されました。


次にポンペイ港の問題⁽⁶⁾に移ります。こうした調査を行っているうちに、ポンペイは都市としてこれだけ立派で、農村にもあれほどの葡萄園、葡萄酒製造の施設があることも明らかになりました。さらにローマ時代ストラボ(66 B.C.-A.D.21)は『地理誌』(V. 4. 8)中で「ポンペイは港(porto)である」とも書いています。この港というのが具体的にポンペイのどこにあるのか、当初はあまり気にかけていませんでした。しかし一〇年ほど前、ナポリから南へ通ずる高速道路の拡張工事の現場から突然すごい遺跡が出てまいりました。その『食堂の別荘(Villa dei triclini)』と呼ばれる遺跡が出土した後、道路公団の社長とポンペイ観光局の局長が、出版された遺跡

の報告書をもって私のところへやってこられました。「日本に帰った時にぜひこの遺跡を紹介してほしい。日本からの観光客が増えるように宣伝してほしい。」という用件でした。その立派な図録の中に、「ポンペイに港があった。」とはつきり書いてあるのです。これで私は確信を得まして、港の発掘状況について二年前から調べ始めました。その結果が配布資料(四六頁)「VIII. ポンペイ海岸地区 Pagus Maritimus (現在のサンタツボンデイオ地区、モレツジネ地区、ボッタロ地区)における発掘状況」に示してあります。こうした発掘の報告なども、道路公団の社長から頂いた本の中に書かれております。資料付図Ⅶはそうした主要な遺跡、遺物、遺構の分布図です。この図にある1から28の数字が、現在まで発掘された遺跡の総数及び場所であります。これらの遺跡は民家の中から見つかったため、残念ながらほとんどすべて一般には非公開となっております。私も20番の遺跡にあるフレスコの絵画(付図XV及び図版26 食堂の別荘の壁画)しか見たことがございません。しかし、ポンペイ海岸地区に含まれる現在のサンタツボンデイオ地区、モレツジネ地区、ボッタロ地区からの出土遺物、遺構などについてそれぞれの地区に性格の相違はあるけれども、港

湾施設に必要な倉庫あるいは葡萄酒、オリーブ油、魚醬などの運搬、輸送に必要な容器としてのアンフォラ、漁業用具、さらに交易商人の存在を示す取引き台帳としての蠟板 *favollette cerate*、豪商(交易商人)の豪華な食堂の別荘(図版26)、さらには砂丘、海岸線の確認などによりポンペイが大きな交易港であったことが次第に明らかになってまいりました。

その海岸地区発掘分布図から割り出した想像図によると、ローマ時代の海岸線は現在よりもはるかに内陸まで及んでおりました。ポンペイの遺跡は現在の海岸線から大体一二五〇メートル内側のところにあり、その港は『海の門』という城門から七〇〇メートルのところにあっただろうと推測されています。そうした推測のもとに当時と現在の海岸線を比較したものが、配布資料の付図Ⅷ(「79年噴火以前のポンペイ海岸線」)であります。

このような観点から改めて、とくにポンペイの主要な産業でありました農園での葡萄酒の製造工程(付図IX、X)、生産された葡萄酒の運搬方法(付図XII)、また市内にはタベルナ飲食店(付図XI)やテルモポリウム *thermopolium* と呼ばれる立飲屋が多く、これらの立飲屋は

裕福な家の軒先に多いこと、これはこの家の屋主が農園経営と関係があつたのではないかと推測されます。また遺跡の各地から葡萄酒運搬用及び貯蔵用の容器（付図Ⅻ）が多数に発見され、これは単に個々の家庭の消費用のものではなく、葡萄酒商人が存在したことを示すものです。またかなりの葡萄酒商人あるいは交易商人の存在したと推測されます。たとえば住宅内の壁面に刻印された船の凶像（付図Ⅻ）、また郊外の自己の墓に立派な交易用の船を彫刻していること、住宅の床面に大きな錨のモザイクをはめ込んでいること、とくに百年祭の家（ 30）の床面にはめ込まれたモザイク（図版33）にはポンペイの城壁及び塔、港の燈台や交易船の荷物の積みおろしの風景が刻まれていることなどはその有力な証拠であります。恐らくポンペイ周辺から産出された葡萄酒はナポリ湾岸の最大の交易港であるポッツォーリに運ばれ、そこから地中海域の諸地域はもちろんのこと、紅海を越え、インド洋を横断して西インド南部にまで輸出されてきました。最近西インドの東岸ポドゥケ（アリカメドゥ）においてローマ時代の商業地区からイタリア・アツレティウムの陶器の断片が発見されています。これはローマ帝国と東方交易が海のシルクロード⁽⁷⁾を通じてかなり

活発であつたことを示すものと思ひます。

実はこのような考えをもつようになった契機はポンペイの遺跡 (I. & G.) からラクシュミー Laksmi 女神と呼ばれるインド産の高さ二四センチメートルの象牙細工の小像（図版34）が出土していたことによります。一般に小像は西インドの西側の港からインド洋、紅海を経てポンペイ（あるいはポッツォーリ港）にもたらされていたといわれているからです。だが最近日本の研究者はこの小像はラクシュミーではないといつておられます。しかし私にとって、この像は明らかに『海のシルクロード』とポンペイとの接点を示す第一等の資料であると思つております。

最後にスライドを用ひまして本日申し上げましたポンペイ遺跡を簡単に御説明いたします。ポンペイを既に見学された方あるいは将来ポンペイ見学を希望されておられる方々に御役に立てば光栄です。

皆さんがポンペイにお行きになりますと、まず「海の門」（マリーナ門）（以下、図版10）から入場され、アポッロ神殿（図版11）及びバシリカ（図版12）と呼ばれる裁判を行う建物をご覧になると思ひます。その先の区域一帯はフォルム（公共広場）（図版13）と呼ばれ、政治

を行う役所、神殿、肉市場、魚市場が集中し、政治、経済、宗教、社会生活の中心であります。それから皆さんはフォルムの一角にあるアッボンダンツァ通り（図版14）という通りを通過して、三角広場（ドリス式神殿）へ出ます。広場の奥には大劇場（図版15）及び小劇場がございます。劇場からさらに東に進まれますと、パラエストラという都市の若者の体育訓練場があります。ついで円形闘技場（図版16）に出ます。そこをご覧になった後、元のアッボンダンツァ通りに出られますと、既に述べた貝殻のウエヌスの家（III. 3. 3）（図版6）の前に出ます。アッボンダンツァ通りはポンペイのメインストリートでありまして、両側にたくさんのお店があります。更にフォルムの方向に進むとスタビア通りと交叉し、そこにスタビア浴場（図版17）があります。浴場の裏側を右側にまわり、二、三分程のところには日本の観光客が必ず訪れるルパナーレ（娼婦の館）（VII. 12. 18）（図版18）があります。それをご覧になり、さらに進むとパン焼窯の家（VII. 2. 22）（図版19、20）の前に出ます。そこからさらに進み、フォルトウーナ通りを横断しヴェズヴィオ門の方向に進むと、ウェッティの家（VI. 15. 1）（図版8）の角に出ます。ここは第四様式のフレスコ絵画を代表す

る住宅で、「ポンペイの赤」*rosso pompeiano* と呼ばれている美しい壁画があります。しかし、今閉まっています。ご覧になれません。そこから少し西に進みますと、ポンペイの最も典型的住宅と呼ばれるファウヌスの家（VI. 12. 25）（図版21、22、23、24）の裏側に出ます。ここは豪華なアトリウム・ペリステリウム住宅です。そこをご覧になって正面玄関からフォルトウーナ通りを進むとフォルム浴場（図版25）の前に出ます。これは一種のヘルセンタールのようなものです。この浴場を見学し、エルコラーノ門の方向に行きますと、秘儀荘（図版2、3）と呼ばれる非常に立派な別荘につきます。これがポンペイの一般の見学コースであります。実際に回るときはもう少し限られた場所になるかと思われま

実は私は今年で七回目の子年を迎えます。甲子園球場のできた大正十三年（一九二四年）の生まれです。これで私は一つ肩の荷が下りたというか、慶應義塾大学に色々お世話になりながら、学术交流というプログラムを言い出した当事者が何もしていない、というちよつと後ろめたい気分がございましたが、本日これで責任を果たせたということで今晚は帰ってゆつくりしようと思つて

おります。それからもう一つこういう席上で申し上げたいのは、私たちは資力の乏しい民間の財団で研究をしていてひしひしと思つたのですが、この研究のためには文部省からずいぶん多くの海外学術調査費をいただきました。本当に頭が下がる思いであります。それから民間の団体からも、ずいぶんとご援助いただきました。たとえば高梨財団からは、本当に長い間私たちのために研究費を頂戴いたしました。野村財団、鹿島財団、日産自動車、及びトヨタ自動車には調査期間中、自動車を無償で提供していただきました。それからダイキン工業からは、ポンペイの施設のために空調一式を全部無償で提供していただきました。こういった財団、企業のご援助がなかったら、私たちの研究は今日まで、これほどまで成果をあげることは出来ていなかったと思います。こういう席上ではございますが、やはり学問のためにお金を寄付していただいた財団、企業には心から御礼を申し上げます。というのが私の気持ちであります。今日は三田史学会ということでしたが、同志社高等学校で5、6年教鞭をとっていた時の教え子にたくさん来ていただきました。どうもありがとうございます。感謝を申し上げます。最後まで賜りました御清聴に厚く御礼申し上げます。

最後になりましたが、私のポンペイ研究は一九五三年『西洋史学』17号にポンペイ近郊におけるウィツラの研究論文を発表して以来今日に及んでいます。とくに一九七七年、一九八三年の二度にわたるイタリア留学期間中、ローマ考古監督局総監故ジャンフィリップポッカレットーニ博士及びラウラフアツブリーニ博士御夫妻、サルツァープリーナリコツティ博士、M・ジュゼッピーナチエルツリイレッツリ博士には大変お世話になりました。またポンペイ学術調査団の一員として長年にわたり、発掘調査中、ナーポリ大学名誉教授アツティリオスタツイオ博士御夫妻、さらにポンペイ考古監督局総監P・G・グッツォ博士、A・ダンブプロシオ博士、A・ヴァローネ博士、A・チアラツルロ博士に御指導、御助言を賜りました。またウィツラの研究に関してポンペイ地区遺跡調査官アンジェランドレアカサーレ博士に現地でのウィツラの見学、資料の提供を受けました。心から感謝いたしております。また発掘期間V・イオリオ博士に多くの御協力、御指導を賜りました。現地での発掘は勿論のこと、関係諸機関との円滑な接触を保つことのできたのも同博士の御尽力によるものと感謝いたしております。私の勤務しておりました古代学研究所は財政破綻のた

め研究活動は中断の状態ですが、ポンペイ学術調査の道を拓かれた故角田文衛所長をはじめ調査隊員の温かい御協力がなければ、私の研究活動は十分な成果をあげることは困難だったろうと思っております。隊員諸氏の友情と協力に心から御礼申し上げます。また本稿作成に当たり、大森先生はじめ三田史学会の関係者にお世話になりました。厚く御礼申し上げます。また本稿の最終の形態に至るまで同志社大学講師坂井聰氏、同志社大学大学院博士後期課程の米本雅一氏の御協力をえました。心から感謝の意を表します。

(二〇〇八年六月二八日三田史学会大会)

註

- (1) P. Carafa, "Recent Work on Early Pompeii" in *The World of Pompeii*, Routledge, 2007, pp.63-72; S. De Caro, "Nuove indagini sulla fortificazione di Pompei", *AION*, 1985, vol.7, pp.75-114; "Lo sviluppo urbanistico di Pompei", *Atti e memorie della Società Magna Grecia*, 1992, ser.3, vol.1, pp.67-90; "The First Sanctuaries", in *The World of Pompeii*, pp.73-81; 坂井聰「ポンペイ城壁をめぐる研究の現状」; 平田隆一「ポンペイの起源—《都市国家》の形成過程—」浅香正『古代都市ポンペイの都市構造と城壁』(平成8-10年度科学研究費補助金 研究成

果報告書、一九九九年三月)に所収。坂井聰「79年の下に眠る歴史—ポンペイ下層発掘調査の語るもの—」, 浅香正監修『ローマと地中海世界の展開』晃洋書房、二〇〇三年に所収、60-79頁。

- (2) H. Sigurdsson, S. Cashdollar, R.S.J. Sparks, "The eruption of Vesuvius in A.D. 79: reconstruction from historical and volcanological evidence", *A/JA*, vol.86, No.1, 1982, pp.39-51; H. Sigurdsson, S. Carey, W. Cornell, T. Pescatore, "The eruption of Vesuvius in 79 A.D.", *National Geographic Research*, 1(3), 1985, pp.332-387; H. Sigurdsson, "The environmental and geomorphological context of the volcano", in *The World of Pompeii*, pp.43-62; 横山卓雄『世界遺産ポンペイ崩壊の謎を解く—火山災害にどう対処したか—』京都自然史研究所、二〇〇七年一〇月。

- (3) A. Barbet, *La peinture murale romaine: Les styles décoratifs pompeïens*, Paris, 1985; F.L. Bastet and M. de Vos, *Proposta per una classificazione del terzo stile pompeiano*, Hague, 1979; H.G. Beyen, *Die pompejanische Wanddekoration vom zweiten bis zum vierten Stil*, I; II, 1, Hague, 1938; 1960; M. Borda, *La pittura romana*, Milano, 1958; L. Curtius, *Die Wandmalerei Pompejis*, Leipzig, 1929; Hildesheim, 1972; A. Laidlaw, *The First Style in Pompeii; Painting and Architecture*, Rome, 1985; R. Ling, *Roman Painting*, Cambridge, 1991; A. Mau, *Geschichte der decorativen Wandmalerei in Pompeji*, Berlin, 1882; G.E. Rizzo, *La pittura ellenistico-romana*, Milano, 1929; K. Schefold,

Die Wände Pompeis, Berlin, 1957; V.M. Stroocka, "Domestic Decoration Painting and "Four Styles" in the World of Pompeii, pp.302-322; シュツゼツペーナーナ・ヘルツリニーレツリ他編『ポンペイの壁画』1、2、岩波書店、一九九一年、浅香正『古代ローマ都市ポンペイの蘇生』芸術堂、一九九五年。

(4) 壁画様式図版 (1-9, 26) (六四―六五頁、六八頁)

1. 被石様式 (180-80B.C.): ファウヌスの家 (VI. 12. 2-5) (1)

2. 建築様式・高層建築とメガログラフイア (巨像) (80-15B.C.): 秘儀荘 (2-3) / テルツィーニョ別荘 6 (4)

3. エジプト化・燭台様式 (15B.C.-A.D.45): M・ルクレティウス・フロントの家 (V. 4. a) (5) / 貝殻のウエヌスの家 (II. 3. 3.) (6) / 黄金の腕輪の家 (VI. 17 [西インストラ]・42) (7)

4. 装飾・幻想化様式 (A.D.45-79): ウェッティの家 (VI. 15. 1) (8) / M・ファビウス・ルプスの家 (VII. 16 [西インストラ]・19) (9) / モレツジネ 食堂の別荘、堅琴を弾くムネッコ (26)

(5) 付図IIに掲げたポンペイ郊外の別荘分布は、E.M. Moormann, "Villas surrounding Pompeii and Herculaneum" in *The World of Pompeii*, pp.436-438 からの引用である。この分布図によれば、スタビア領内のものを除き、一九八五年時点でポンペイ領内に認められる別荘は約81である。

T. Asaka, "Villae Rusticae in the Vicinity of Pompeii", in

古代イタリア都市ポンペイの発掘・学術調査15年

Opuscula Pompeiana, I, 1991, pp.4-34; id., "A Note on the Listing of the Villae Rusticae in the Vicinity of Pompeii", in *Opuscula Pompeiana*, II, 1992, pp.35-43; R.C. Carrington, "Studies in the Campanian Villae Rusticae", *JRS*, XXI, 1931, pp.110-130; id., "Some Ancient Italian Country-Houses", *Antiquity*, vol. VIII, 1934, pp.261-280; *Casaldi di ieri Casaldi di oggi: Architetture rurali e tecniche agricole nel territorio di Pompei e Stabia*, II Settimana per la Cultura 1999; A Casale-A. Bianco, "Primo contributo alla topografia del suburbio Pompeiano", *Estratto della Riv. «Antiqua»*—suppl. al no. 15 Ottobre-Dicembre, 1979; F. Castaldi, "La trasformazione della "villa rustica" romana in rapporto alle condizioni dell'agricoltura", «S. chiara» Napoli, 2(1950) pp.225-304; *Corpus Topographicum Pompeianum* (CTP), University of Texas at Austin, Pars IV, 1977, pp.337-339; Pars V, 1981, pp.22-24; J. D'Arms, "Ville rustiche e ville di «Otium»", in *Pompei* 79, Napoli, 1984, pp.65-96; J. Day, "Agriculture in the Life of Pompeii", *Yale Classical Studies*, III, 1932, pp.167-208; S. De Caro, *La villa rustica in località Villa Regina a Boscoreale*, Roma, 1994; T. Frank, *Economic Survey of Ancient Rome*, Boltenmore, vol. I, 1933; vol. V, 1940; M. Rostovtzeff, *Social and Economic History of the Roman Empire*, Oxford, 1926; K. D. White, *Roman Farming*, London & Southampton, 1970; 浅香正「古代イタリアの大土地経営と奴隷制の関係」『西洋史学』第17巻、一九五三年、36頁以下; 浅香正

『ポンペイ近郊における農業屋敷の学術調査』平成7、8年度高梨財団助成金報告書、一九九七年・井上智勇『ローマ経済史研究』弘文堂、一九四八年・村川堅太郎『羅馬大土地所有制』（社会構成史体系）、日本評論社、一九四九年。

(9) M. Mastroberto, "Pompei e la riva destra del Sarno", in *Mitis Sami Opes*, Denaro Libri, 2000, pp. 25-32, 142-143. 『ポンペイの輝き 古代ローマ都市 最後の日』（ポンペイ展図録）朝日新聞社、二〇〇六年、一六六一—一八一頁。

(7) V. Begley, *The Ancient port of Arikamedu : New excavations and researches 1989-1992*, 1996 ; L. Casson, *The Periplus Maris Erythraei : Text with Introduction, Translation, and Commentary*, Princeton University Press, 1989 ; M.P. Charlesworth, *Trade Routes and Commerce of the Roman Empire*, 2nd ed., 1926 ; M.G. Raschke, "New Studies in Roman Commerce with the East", *ANRW* II, 9, 2, Berlin, 1978, pp.604-1361 ; E. Warrington, *The Commerce between the Roman Empire and India*, 1st ed., 1928, 2nd ed., 1974 ; M. Wheeler, *Rome beyond the Imperial Frontiers*, London, 1954 (邦訳「ウィーラー、糸賀昌昭訳『大ローマ帝国の膨脹』みすず書房、一九五七年)・浅香正「古代ローマ都市ポンペイとシルクロード」シルクロード学研究叢書2、二〇〇〇年・「エリュトウラー海案内記」について」シルクロード学研究叢書六、二〇〇二年・村川堅太郎訳『エリュトウラー海案内記』生活社、一九四六年。

資料（発表当日配布—若干修正）

古代イタリア都市ポンペイの発掘・学術調査15年—

—考古学的資料からみた産業と交易・海のシルクロード—

I. ローマ都市ポンペイの成立と発展

- (1) 前九・八世紀頃オスキ人による村落共同体
- (2) 前六世紀頃 都市ポンペイの成立
(a)ギリシア人 (b)エトルスキ人
- (3) 前四二〇年頃サムニウム人による支配
- (4) 前四世紀ローマによる中部イタリアの支配
(a)サムニウム戦争 (b)ポエニ戦争
- (5) 同盟市戦争（前九一—八八年）及びローマによるポンペイ支配
(a)前八〇年プブリウス・スッラによるローマ植民都市の建設
- (6) ローマ時代（前八〇—後七九年）
- (7) 後七九年八月二四日ウエスウィウス火山の噴火により埋没

- (a)小プリニウス書翰 (VI. 16: 20) 一〇六年頃
- (b)H. Sigurdsson による噴火経過と火砕流

古代イタリア都市ポンペイの発掘・学術調査15年

II. ポンペイの発掘

- (1) 一七四八年ナポリ王国の支配者ブルボン王朝カルロ三世により発掘開始 宝探し
- (2) 一八六一年イタリア王国とジュゼッペ・フィオリッリによる科学的発掘調査：考古学上の都市区画、石膏鑄型どりなど

III. ポンペイ遺跡の現状（付図I）

- (1) 規模
(a)全面積約六三ヘクタール（1/5未発掘）
(b)周囲三・二キロメートル
(c)城門七、塔一二、東西一、二〇〇メートル、南北六五〇メートル
- (2) 考古学上のポンペイ都市区画
地区 regio 街区 insula 家屋 casa 戸口
たとえば第六地区にあるウエッティの家は VI. 15. 1. と表示される。これは考古学上の区画で、ローマ時代の都

四三（四二一）

市区画ではない。現在地区九、街区一〇九、戸口番号は全体で一二六一。一つの住宅に複数の戸口がある場合があり、家屋総数ではない。

- (3) 城壁外のポンペイ都市領 *territorium* はいくつかの農村地区 *pagus* に分割され、各地区にいくつかの別荘 *villa* が存在した。

IV. ポンペイ市内の主要建造物 (付図I)

(1) 公共建造物

- (a) 広場：フォルム (公共広場) (A)、三角広場 (M)
 (b) 凱旋門 *arcus*：ティベリウス帝の凱旋門 (D)
 ゲルマニクスの凱旋門、カリグラ帝の凱旋門
 (c) バシリカ *basilica* (L)
 (d) 行政役所：二人官役所 *duumviri* (I)、市参事会議事堂 *curia* (J)、按察官役所 *aediles* (K)、選挙場 *comitium*
 (e) 神殿：アポロロ神殿 *Apollo* (B)、ユピテル神殿 *Jupiter* (C)、ユピテル・メイリキオス神殿 *Jupiter Melichios*、ラレーヌス神殿 *Lares* (F)、ウエヌス神殿 *Venus*、フォルトゥーナ・アウグスタ *Fortuna Augusta*、ウエスパシアヌス神殿

- Vespasianus* (G)、イシス神殿 *Isis* (Q)
 (f) 公共浴場 *thermae*：フォルム浴場 *Forum* (T)、スタビア浴場 *Stabia* (U)、中央浴場 (V)、サルノ浴場 *Sarno*、郊外浴場
 (g) 円形闘技場 *amphitheatrum* (S)
 (h) 劇場 *theatrum*：大劇場 (O)、小劇場 (音楽堂) *odeum* (P)

- (i) 体育訓練場 *palaestra*：大パラエストラ (R)、サムニウム期体育訓練場 *palaestra sannitica*

- (j) マケッルム (肉市場) *macellum*

- (k) エウマキアの公会堂 *Eumachia* (H)

- (l) 剣闘士営舎 *caserna dei gladiatorii*

(2) 商工業用建造物

- (a) 旅館・居酒屋 *caupona*

- (b) 売店・飲食店 *taberna*

- (c) 立飲屋 *thermopolium*

- (d) パン屋 *pistrinum*

- (e) 毛織物・縮絨工房 *fullonica*

- (f) 調味料 (魚醬) 工房 (ガルム *garum*)

(3) 住居形式

- (a) アトリウム型 *atrium*：サルステイウスの家

(VI.2.4.)

(b) アトリウム・ペリステュリウム型 atrium-peristylum : ファウヌスの家 (VI.12.2-5)

V. 建築及び絵画様式

(1) 建築第一段階

第一期サムニウム時代 (前四〇〇—三〇〇年)

第二期サムニウム時代 (前三〇〇—一八〇年)

(2) 建築第二段階

第二期サムニウム時代・絵画第一様式時代 (前一八〇—一八〇年) : ファウヌスの家 (VI.12.2-5)

(3) 建築第三段階・絵画第二様式時代 (前八〇—前五年) : 秘儀荘 : プブリウス・ファンニウス・シ

ユニストル荘 : テルツイーニョ別荘 6

(4) 建築第四段階・絵画第三様式時代 (前一五—後四

五年) : M・ルクレティウス・フロントの家 (V.4.

e) : アグリッパ・ポストウムス荘 : 貝殻のウエヌ

スの家 (II.3.3) ; 黄金の腕輪の家 (VI.17 (西街区).42)

(5) 建築第五段階・絵画第四様式時代 (後四五—後七

九年) : ウェッティの家 (VI.15.1) ; M・ファビウ

古代イタリア都市ポンペイの発掘・学術調査15年

スルプスの家 (VII.16 (西街区).19)

VI. ポンペイ郊外における別荘 villa (付図II)

(1) 農園別荘 villa rustica

(a) ヴイツラーレジーナ荘 (付図III)

(b) ルキウス・カエキリウス・ユクンドゥス荘 (付図

IV)

(c) テルツイーニョ 別荘2 (付図V)、別荘6 (付

図VI)

(2) 閑暇別荘 villa di otium

(a) デイオメデス荘

(b) 秘儀荘

(c) オプロンティス ポツパエア荘

VII. 古代学研究所の発掘調査

(1) 「カプア門」の発掘 (一九九三)

(2) 人骨の発見と火山災害 : 火砕流

(3) 水道 aquaeductus と市内給水施設

VIII. ポンペイ海岸地区 Pagus Maritimus (現在のサンタ

ッボンディオ S. Abbondio 地区、モレッツィネ Moreg-

gine 地区、ボッタロ Bottaro 地区) における発掘状況

四五 (四一三)

及びその主要な発掘の遺物、遺跡、遺構(付図Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ)

- (1) 既に一八三〇年代考古学者ルツジエロ Ruggiero が郊外の発掘中に一二本の杉の幹を発見。これは港に停泊中の艦隊の帆柱であると誤認した。

(2) ボッタロ地区

- (a) 大きな倉庫(Ⅱ)、及びその中に多くのアンフォラ、カシ材の木片、若干の貨幣、錨など出土

- (b) 交易商人M・ケツリウスIIアフリカーヌス *Cellius Africanus* の建造物(11)

- (c) 一連の飲食店 *taberna* の発見。その中に多くの漁業用具、アンフォラなど出土(8)

- (d) 砂丘の発見。海岸線の確認(付図Ⅷ)

(3) モレツジネ地区

- (a) 二〇室のある大きな倉庫の発見(Ⅴ)。かつある部屋に三六の骸骨が出土—スタビア門からの避難民のもの。

- (b) 一般に食堂の別荘 *Villa dei triclini* (20) あるいはC・スルピキウスIIキンナムス *Sulpicius Cinna-mus* の別荘と呼ばれる建造物(付図ⅩV)

特色：①豪華なフレスコ絵画 ②蠟板 *tavolette*

Cerate の出土—スルピキウス商人の確認 ③大理石板に所有者SVLの銘辞

(4) サンタツボンディオ地区

主として建造物や農耕の畝、車の轍の跡、注目すべきは青銅器時代の遺物(21)及びディオニユス神殿 *Santuario Dionisiaco* (ヘレニズム時代からローマ時代)(19)

以上の発掘から噴火以前ポンペイには大きな入江があり、大きな船を収容しうる港であったこと、またサルノ川河口には倉庫などの港湾施設があったと考えられる。ポンペイは港湾都市であった。

Ⅸ・葡萄酒商人と交易

- (1) 郊外における多数の葡萄園及び葡萄酒製造施設をもつ農園別荘 *villa rustica* の存在

- (2) 葡萄酒製造工程(付図Ⅹ、Ⅹ)

- (3) 都市内における多くのテルモポリウム *thermopolium* (立飲屋)及びタバベルナ *taberna* (飲食店)(付図ⅩI)

- (4) 葡萄酒の販売に関するフレスコ画—ウエッティの

家 Casa dei Vetti (VI.15.1)

(5) 葡萄酒の運搬手段

(a) 革袋車 (付図XII) あるいは樽

(b) アンフォラ (付図XIII) ①運搬用②貯蔵用 アマラントゥス Amaranthus のカウポーナ (I.9.11-12) 、

葡萄酒商人の家 Casa del Vinaio (IX.9.6-7) 、百年祭の家 Casa del Centenario (IX.8.6) 。

(c) 船 ①エウローパの船の家 Casa della Nave Europa (I.15.3) (付図XIV)

②錨の家 Casa dell'Ancora (VI.10.7)

③エルコラーノ門郊外のガイウス・ムナティウス・ス・ファウストゥス C. Gaius Munatius Faustus の墓

(6) カンパニア及びポンペイ周辺における葡萄酒の輸出、輸入状況

(a) ポンペイ及び周辺産の葡萄酒は、各地に出土したアンフォラに記された銘辞により、ローマは勿論イギリス、ガッリア、スペイン、アフリカ、紅海、さらにはインドまで輸出されていた。

(b) しかし、ポンペイには地中海のクレータ島、コス島、さらにはスペインのものも輸入されていた。

(c) ポンペイ産の葡萄酒は飲みすぎると翌日頭痛がするといわれている。

X. ローマ帝国と東方交易：海のシルクロード (付図XVI)

(1) 『エリュトウラー海案内記』(四〇〇七〇年頃執筆)

(2) ポンペイ出土 (I.8.5) のインド産象牙細工ラクシユミー女神像

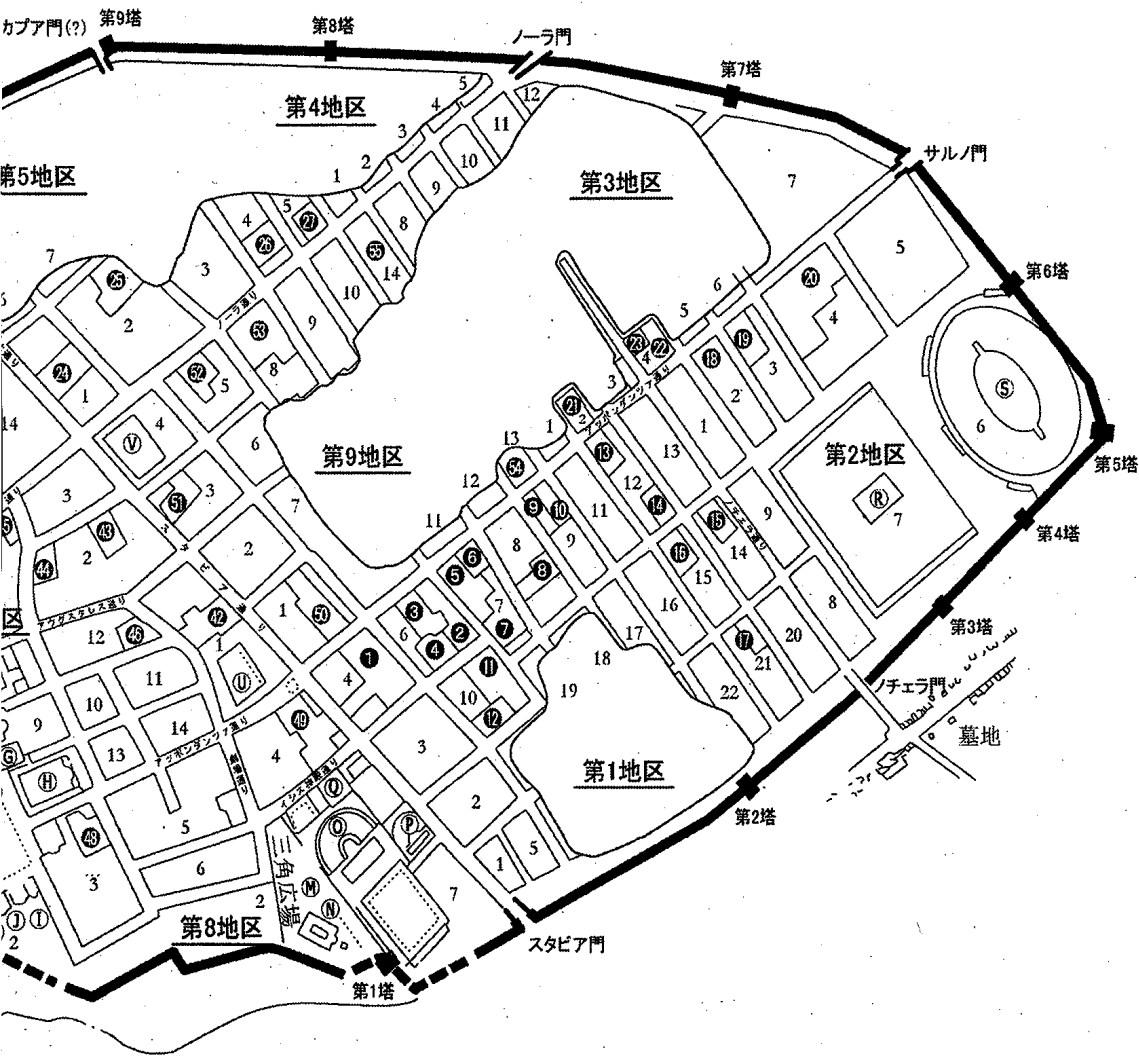
(3) インド南部コインバートルにおけるアウグストゥス帝及びティベリウス帝時代の金貨及び銀貨の出土

(4) 西インド東岸ポドゥケ (アリカメドゥ) にローマ時代の商業地区—イタリア・アレツティウムの陶器の断片の出土

XI. 初期ポンペイの景観図 (Altstadt) (付図XVII)

〈参考文献〉

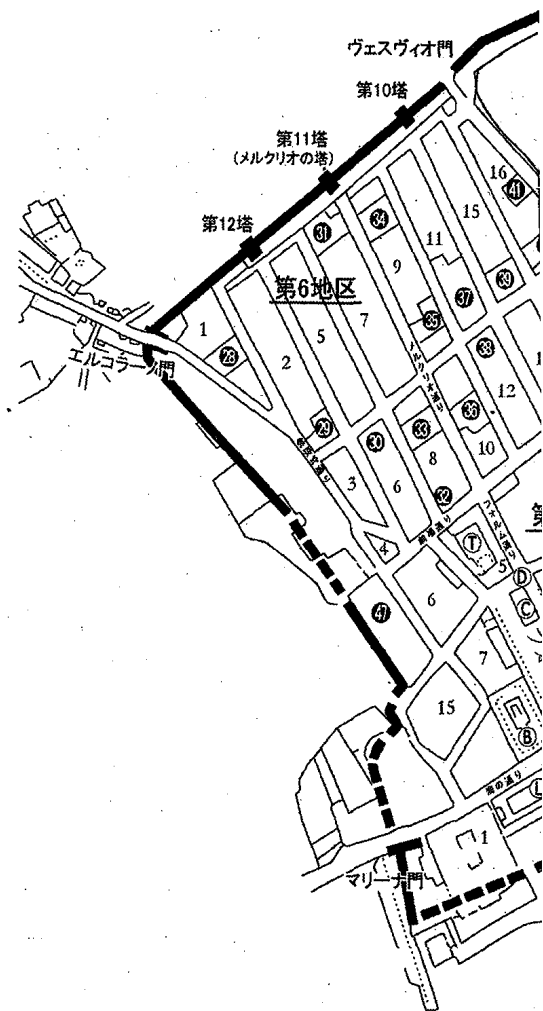
- E・コルテイ著、松谷健二訳『ポンペイ』みすず書房、一九六四年
- 野上素一・金倉英一『エトルリア・ローマ・ポンペイ』新潮社、一九七〇年
- 浅香 正『ローマ文明の跡を訪ねて』吉川弘文館、一九七五年
- J・J・ダイス著、穴沢味光訳『ヘルクラネウム』学生社、一九七六年
- 青柳正規「エウローパの船の家」『東京大学文学部文化交流研究施設報告書』、一九七七年
- 金子史郎『ポンペイの滅んだ日』原書房、一九八八年
- G・チェルリ・イレツリ他「イタリアにおける西紀一世紀の都市と農村」『古代文化』第四〇巻第一〇号（特別号）、一九八八年
- R・エテイエンヌ著、弓削達監修『ポンペイ・奇跡の町』創元社、一九九一年
- 堀 賀貴『古代ローマ都市ポンペイに関する建築史的研究』（博士論文）、一九九四年
- 浅香 正『ポンペイ—古代ローマ都市の蘇生』芸艸堂、一九九五年
- 本村凌二『ポンペイ・グラフィティ』中公新書、一九九六年
- 横山卓雄「A・D・七九年のヴェスヴィオス火山噴火と古代ポンペイ都市の壊滅」『第四世紀研究』三八—四、一九九九年
- アントニオ・ヴァローネ著、本村凌二監修、広瀬三矢子訳『ポンペイ・エロチカー—ローマ人の愛の落書き—』PARCO出版、一九九九年
- サルバトーレ・ナツポ著、横関裕子訳『ポンペイ 完全復元二〇〇〇年前の古代都市』ニュートンプレス、一九九九年
- 岩井経男『ローマ時代イタリア都市の研究』ミネルヴァ書房
- 本村凌二『優雅でみだらなポンペイ—古代ローマ人とグラフィティの世界—』講談社、二〇〇四年
- 横山卓雄『歴史と自然史の接点 世界遺産ポンペイ崩壊の謎を解く—火山災害にどう対処したか—』京都自然史研究所、二〇〇七年



街地図

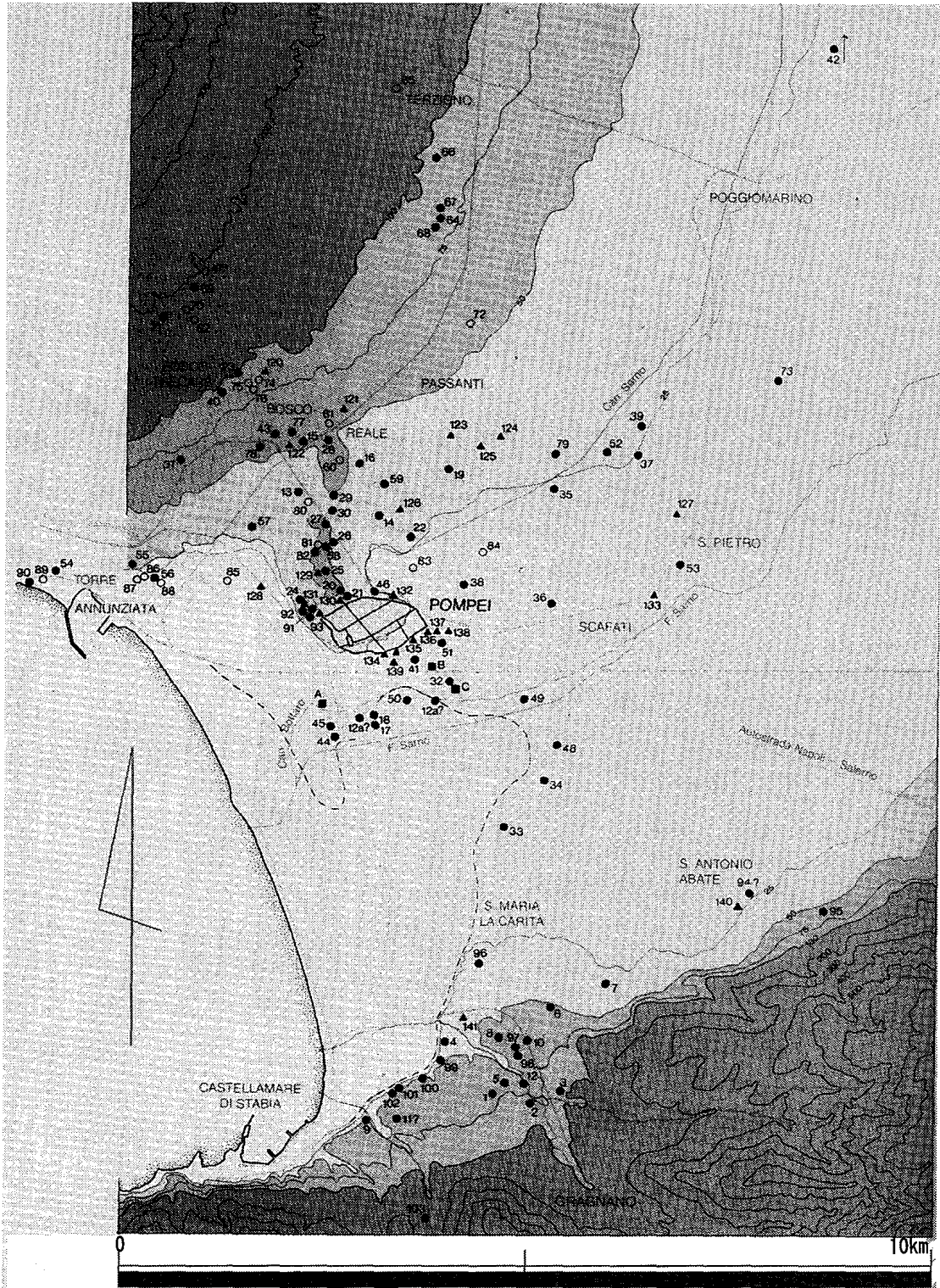
- | | | | |
|------------|----------|----------|----------|
| ラレース神殿 | Ⓚ 按察官役所 | Ⓟ 小劇場 | Ⓤ スタビア浴場 |
| ウェスパシアヌス神殿 | Ⓛ バシリカ | Ⓠ イシス神殿 | Ⓥ 中央浴場 |
| エウマキアの公会堂 | Ⓜ 三角広場 | Ⓡ パラエストラ | |
| 二人官役所 | Ⓝ ドリス式神殿 | Ⓢ 円形闘技場 | |
| 市参事会議事堂 | Ⓞ 大劇場 | Ⓣ フォルム浴場 | |

- ① 竖琴奏者の家 (I,4,5)
- ② クリプトボルティコ (地下列柱廊) の家 (I,6,2-4)
- ③ ステファヌスのフロニカ (I,6,7)
- ④ ケイイの家 (I,6,15)
- ⑤ パクイウス=プロクルスの家 (I,7,1)
- ⑥ 神官アマンドゥスの家 (I,7,7)
- ⑦ エフェボの家 (I,7,11)
- ⑧ 四様式の家 (I,8,17)
- ⑨ 美しいイムプルウィウムの家 (I,9,1)
- ⑩ 果樹園の家 (I,9,5)
- ⑪ メナンドロスの家 (I,10,4)
- ⑫ 恋人たちの家 (I,10,11)
- ⑬ ソテリウスのパン焼窯の家 (I,12,1)
- ⑭ ウムブリキウスのガラム工房 (I,12,8)
- ⑮ サルノ川ラレース神祠堂の家 (I,14,7)
- ⑯ エウローバの船の家 (I,15,3)
- ⑰ 逃走者の家 (I,22,5)
- ⑱ D・オクタウィウス=クアルティオの家
(ロレイウス=ティブルティヌスの家) (II,2,2)
- ⑲ 貝殻のウェヌスの家 (II,3,3)
- ⑳ ユリア=フェリクスの農園 (II,4,3)
- ㉑ A・トレビウス=ウァレンスの家 (III,2,1)
- ㉒ 道德家の家 (III,4,2)
- ㉓ ピナリウス=ケリアリスの家 (III,4,6)
- ㉔ L・カエキリウス=ユクンドゥスの家 (V,1,26)
- ㉕ 銀婚式の家 (V,2,i)
- ㉖ M・ルクレティウス=フロントの家 (V,4,a)
- ㉗ 剣闘士の家 (V,5,3)
- ㉘ 外科医の家 (VI,1,10)
- ㉙ サルスティウスの家 (VI,2,4)
- ㉚ パンサの家 (VI,6,1)
- ㉛ アポッロの家 (VI,7,23)
- ㉜ 悲劇詩人の家 (VI,8,3)
- ㉝ 大噴水の家 (VI,8,22), 小噴水の家 (VI,8,23)
- ㉞ メレアグロスの家 (VI,9,2)
- ㉟ ディオスクリ家の家 (VI,9,6)
- ㊱ 錨の家 (VI,10,7)
- ㊲ ラピュリントゥスの家 (VI,11,10)
- ㊳ ファウヌスの家 (VI,12,2-5)
- ㊴ ウェッティの家 (VI,15,1)
- ㊵ アモリーニ=ドラーティの家 (VI,16,7)
- ㊶ アラ=マッシマの家 (VI,16,15)
- ㊷ シリクスの家 (VII,1,25)
- ㊸ M・ガイウス=ルフスの家 (VII,2,16)
- ㊹ パン焼窯の家 (VII,2,22)
- ㊺ 狩猟の家 (VII,4,48)
- ㊻ 娼婦の家 (VII,12,18)
- ㊼ M・ファビウス=ルフスの家 (VII, 16 (西街区), 19)
- ㊽ 猪の家 (VIII,3,8)
- ㊾ コルネリウス=ルフスの家 (VIII,4,15)
- ㊿ M・エピディウス=ルフスの家 (IX,1,20)
- 1 ① マルクス=ルクレティウスの家 (IX,3,5)
- 2 ② ピュグマイオイの家 (IX,5,9)
- 3 ③ 百年祭の家 (IX,8,6)
- 4 ④ C・ユリウス=ポリュピウスの家 (IX,13,1-3)
- 5 ⑤ M・オベリウス=フィルムスの家 (IX,14,4)
- 6 ⑥ 秘儀荘

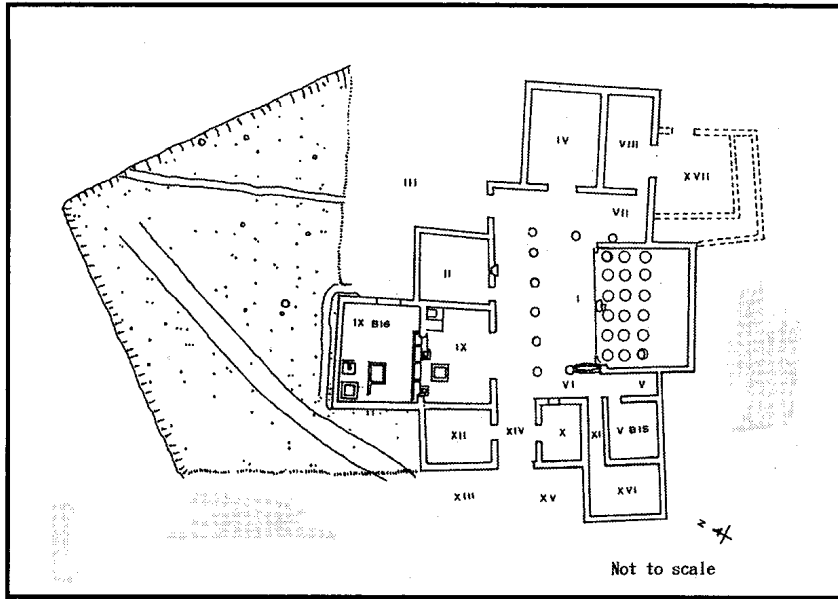


付図I. ポンペ

- Ⓐ フォルム
- Ⓑ アポッロ神殿
- Ⓒ ユピテル神殿
- Ⓓ ティベリウス帝の凱旋門
- Ⓔ マケッルム



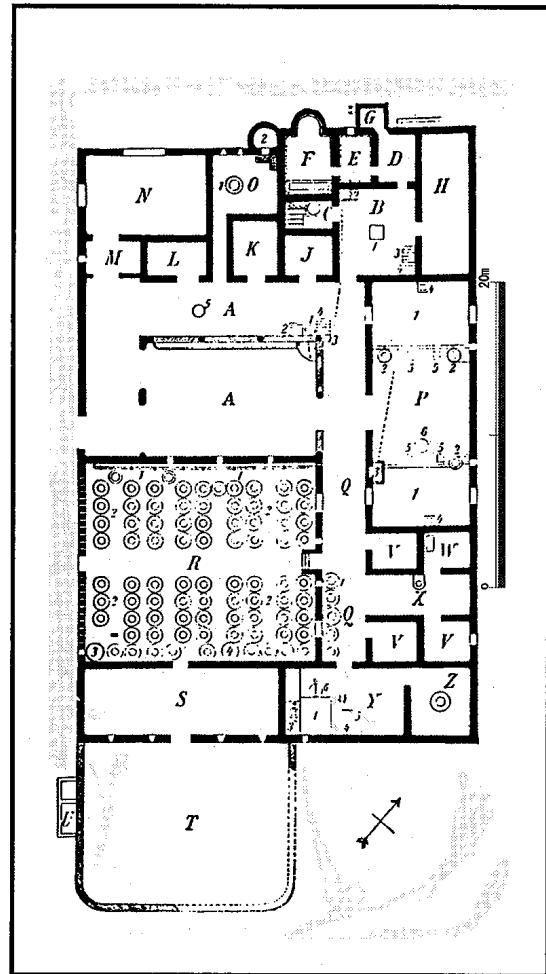
付図II. ポンペイ郊外における別荘分布図



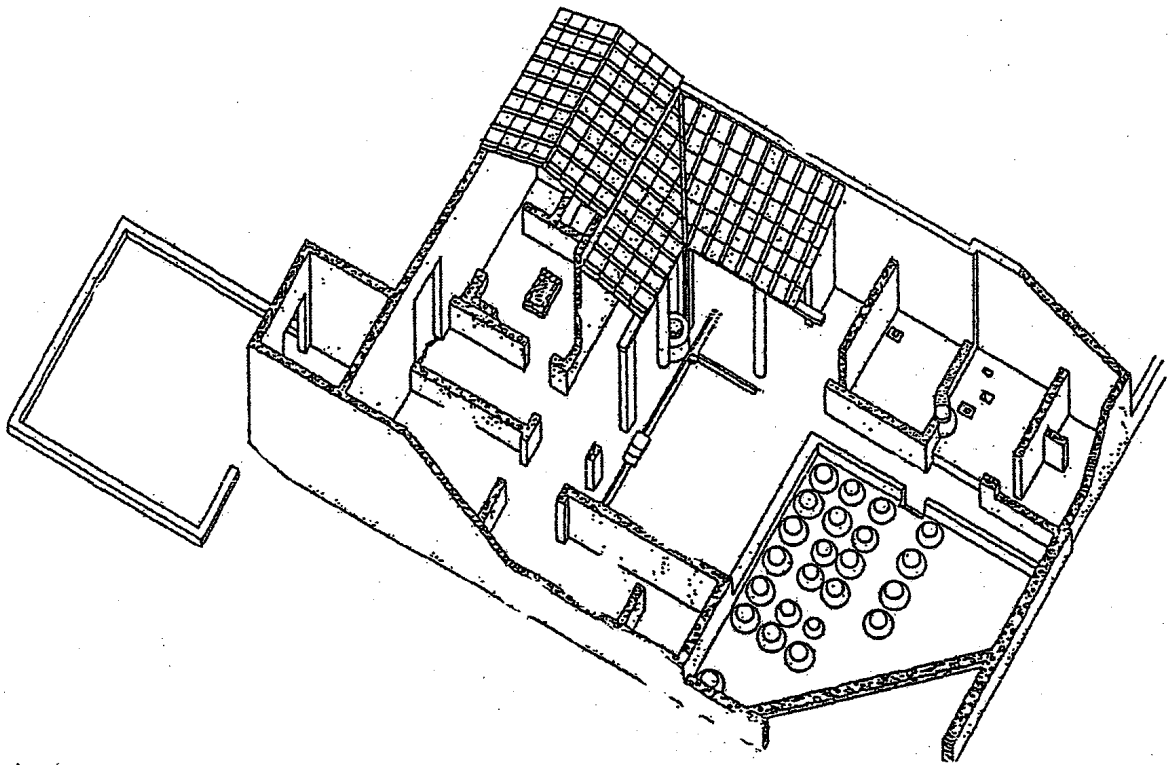
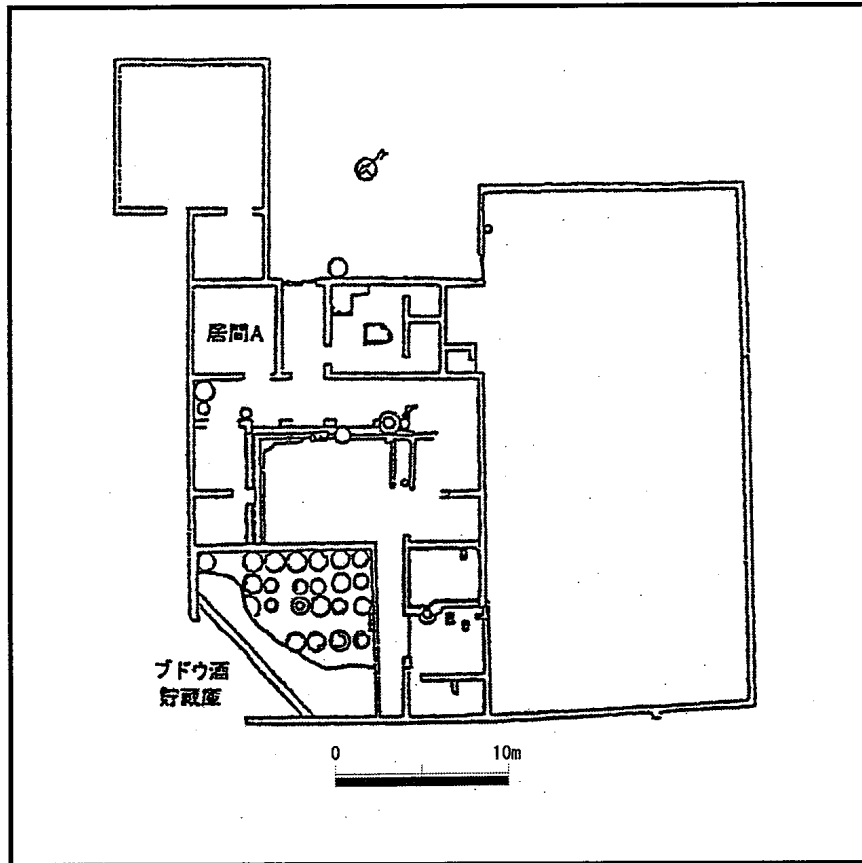
- I. 葡萄酒醗酵室
- II. 台所
- III. 用途不明
- IV. 食堂
- V—VI. 袖廊
- V Bis. (奴隷) 部屋
- VII. 中庭
- VIII. 秤置場
- IX—IX Bis. 葡萄搾汁室
- X. 門番部屋
- XI. 通路
- XII. 道具部屋
- XIII. 用途不明
- XIV. 玄関通路
- XV. 用途不明
- XVI. (奴隷) 部屋
- XVII. 土間

付図 III. ヴィッラーレジーナ荘

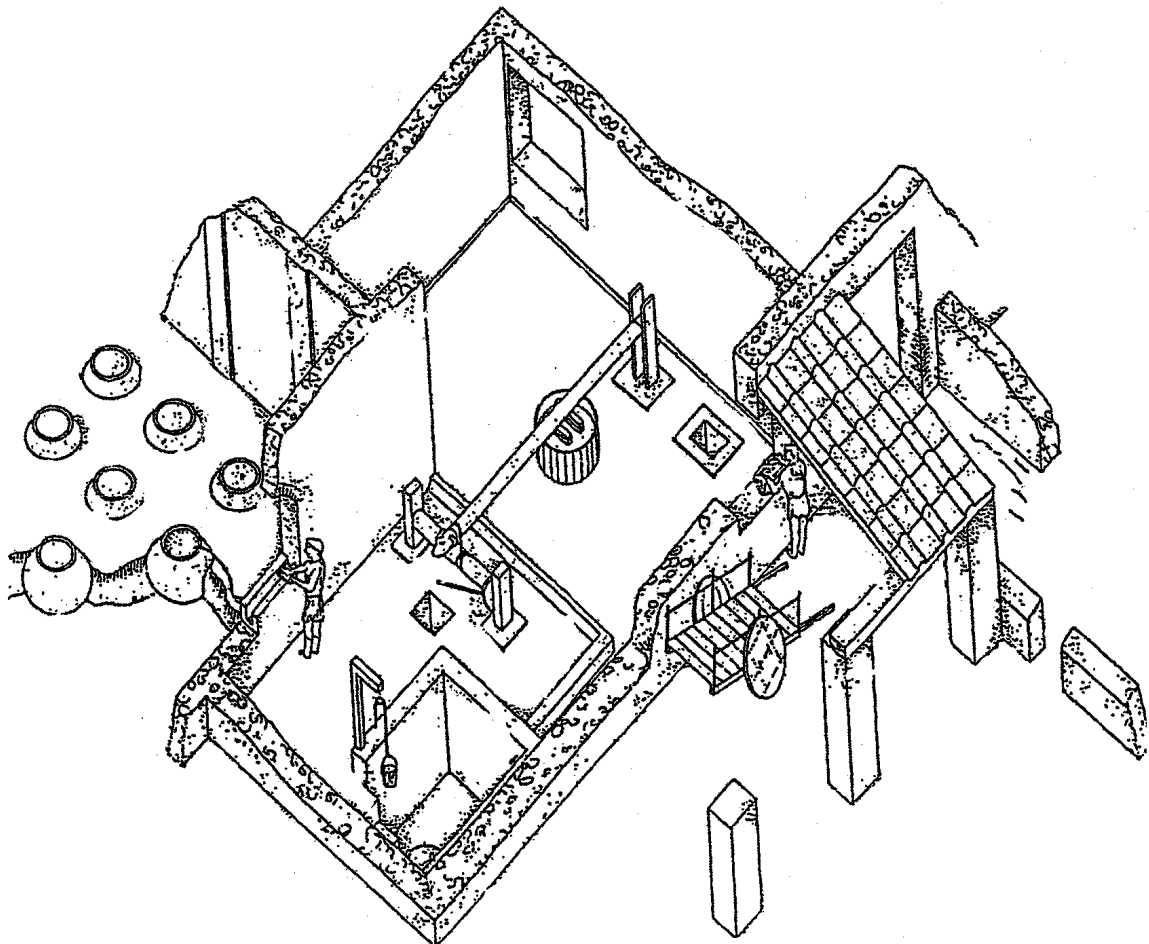
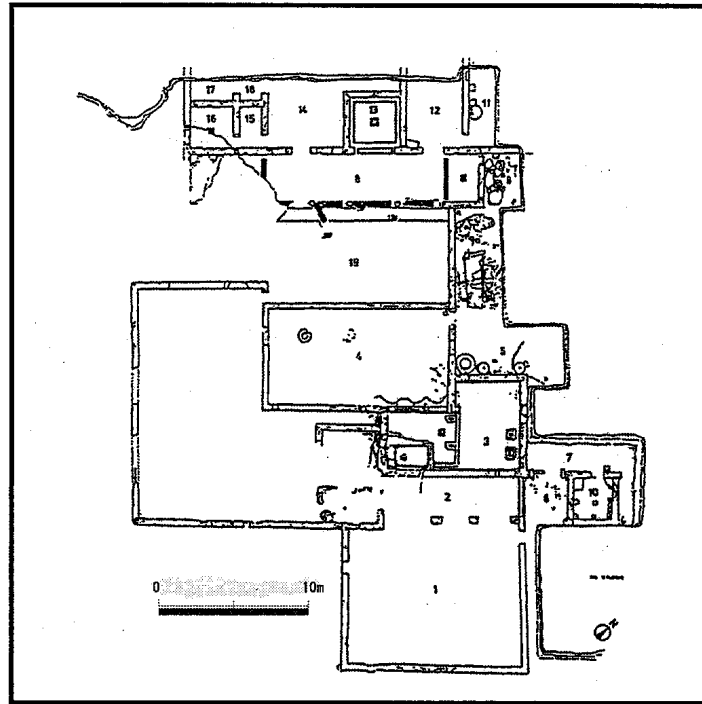
- | | |
|------------------|--------------|
| A. 中庭 | 3. 2番搾り用容器 |
| 1,5. 井戸側 | 4. 搾汁器長柄取付台口 |
| 2. 水槽 | 5. 長柄巻揚機取付台口 |
| 3. 水溜 | 6. 長柄巻揚機取付台口 |
| 4. 階段 | 下への入口 |
| B. 台所 | Q. 通路 |
| 1. 炉 | 1. 葡萄酒用壺 |
| 2. 水溜 | R. 葡萄酒醗酵室 |
| 3. 階段 | 1. 導酒管 |
| 4. 地下室入口 | 2. 醗酵用壺 |
| C. 浴室かまど | 3. 鉛製釜 |
| D. 脱衣室 | 4. 井戸側 |
| E. 微温浴室 | S. 穀物置場 |
| F. 高温浴室 | T. 脱穀土間 |
| G. 納屋 | U. 雨水貯水槽 |
| H. 厩舎 | V. 奴隷部屋 |
| J. 道具部屋 | W. 地下室入口 |
| K. 寝室 | X. 手うす |
| L. 寝室 | Y. オリーブ搾汁室 |
| M. 前室 (あるいは番人部屋) | 1. 搾汁器取付台 |
| N. 食堂 | 2. 搾汁器長柄取付台口 |
| O. パン焼場 | 3. 地下室への入口 |
| 1. うす | 4. 長柄巻揚機取付台口 |
| 2. かまど | 5. 長柄巻揚機取付台口 |
| P. 葡萄搾汁室 | 下への入口 |
| 1. 葡萄搾汁土間 | 6. オリーブ油用容器 |
| 2. 葡萄搾汁容器 | Z. オリーブ碎搾器 |



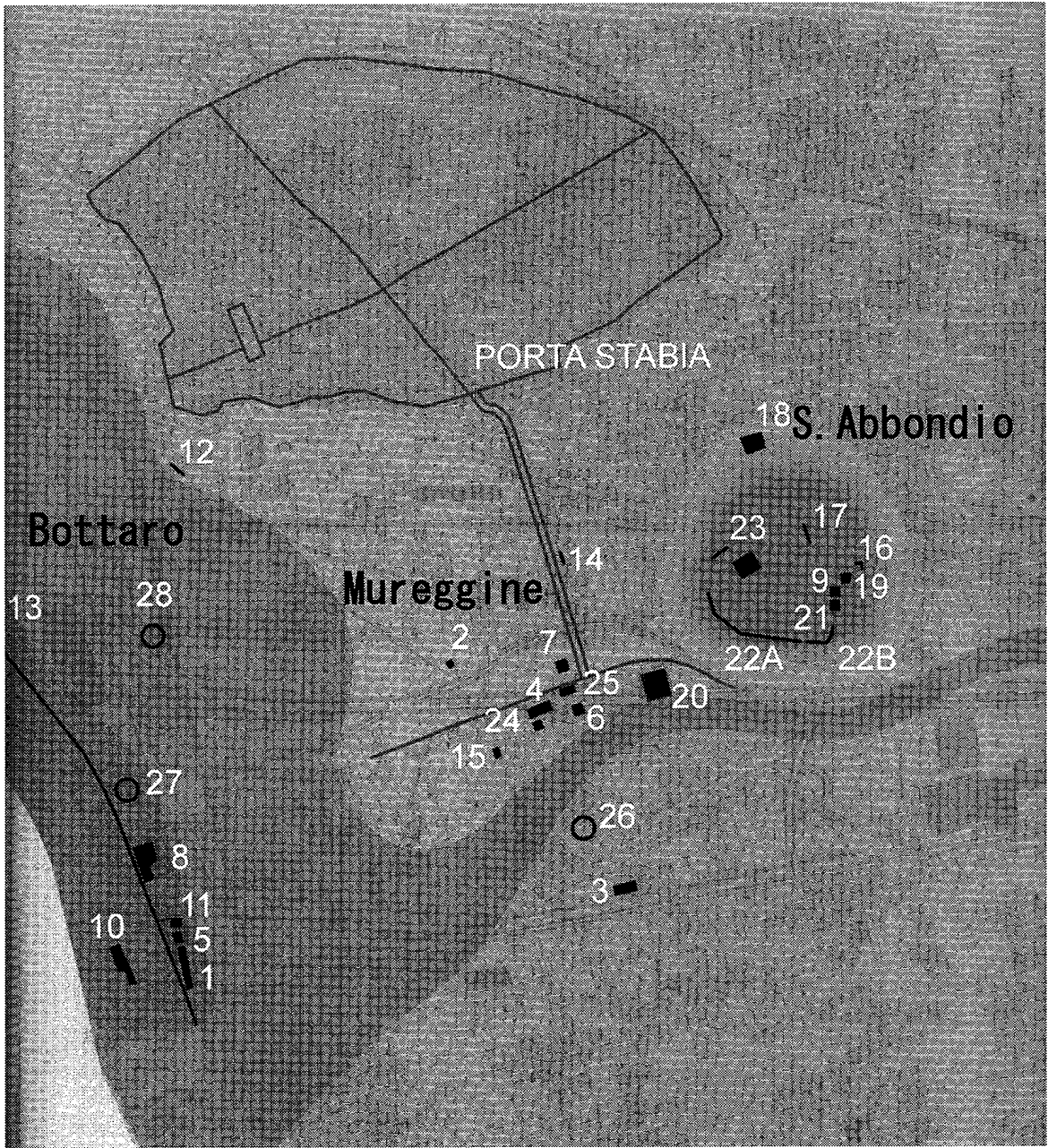
付図 IV. ルキウス=カエキリウス=ユクンドゥス荘



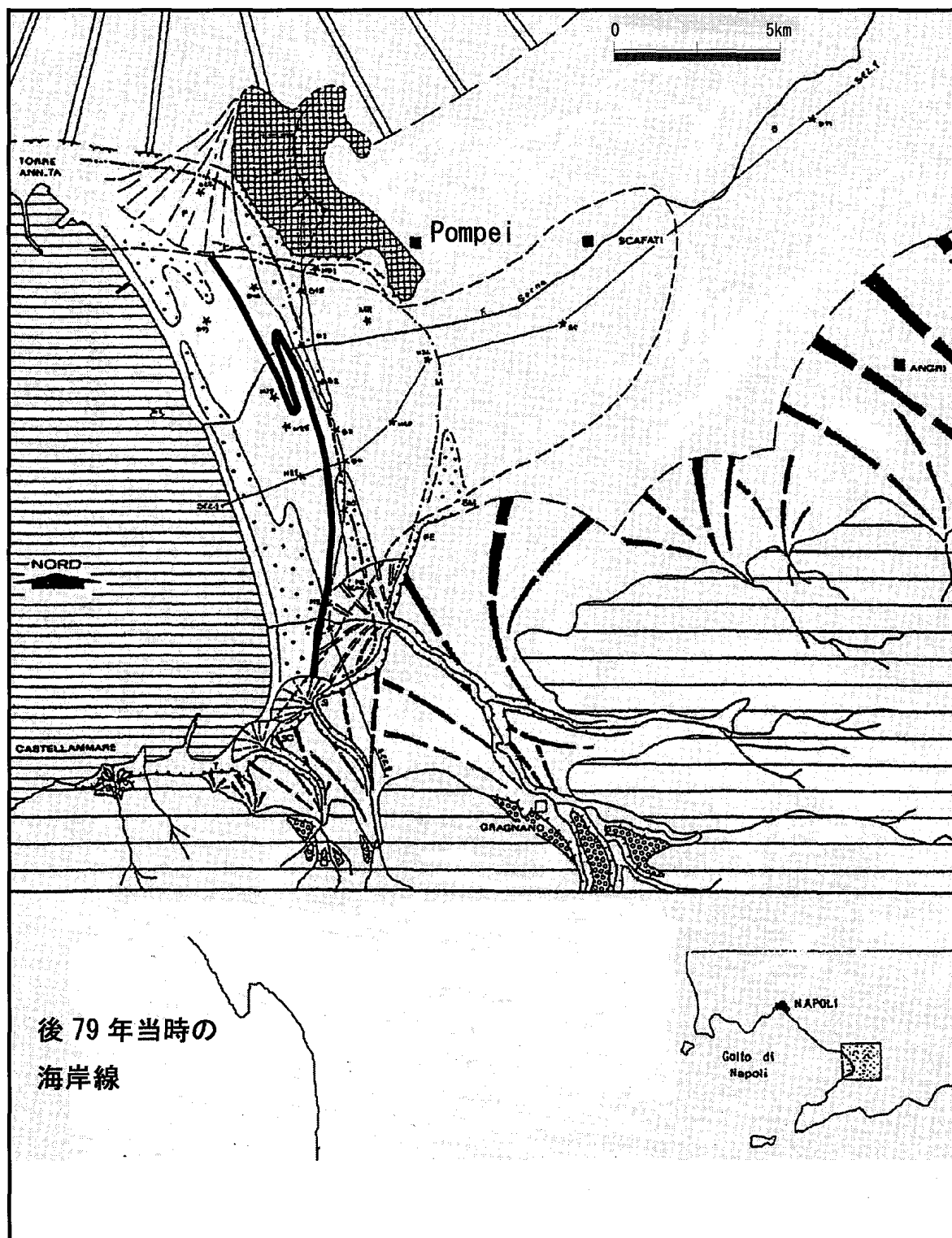
付図V. テルツイーニヨ 別荘2
(上：平面図；下：俯瞰図)



付図 VI. テルツイーニヨ 別荘 6
(上：平面図；下：俯瞰図)

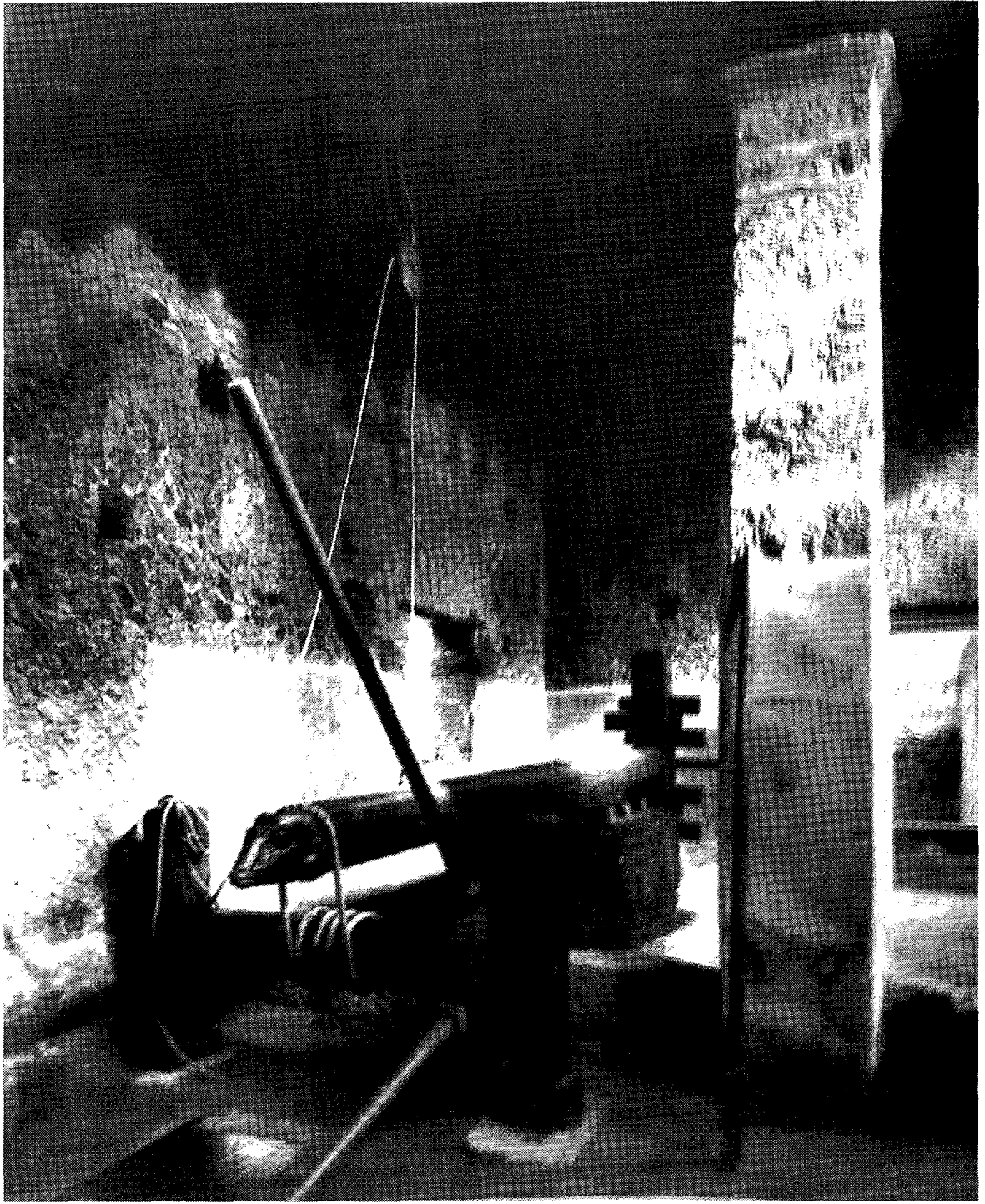


付図 VII. ポンペイ海岸地区遺跡分布図



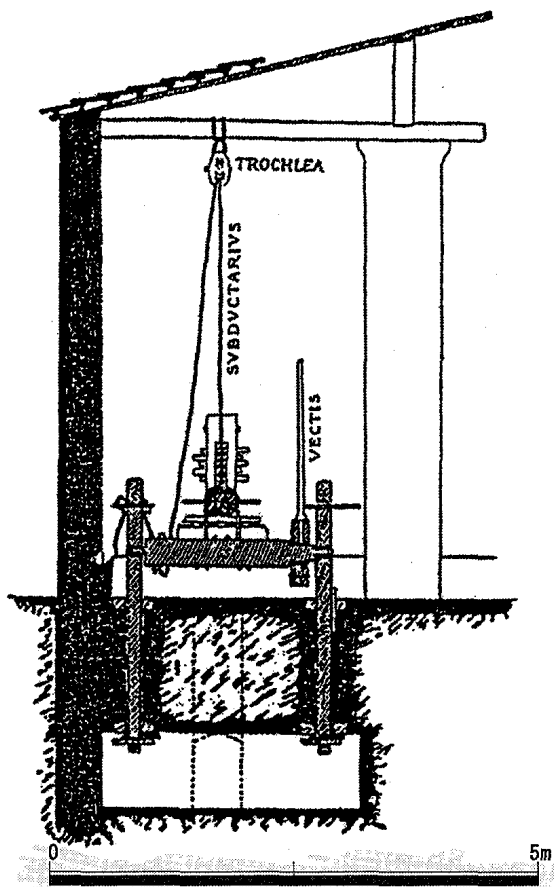
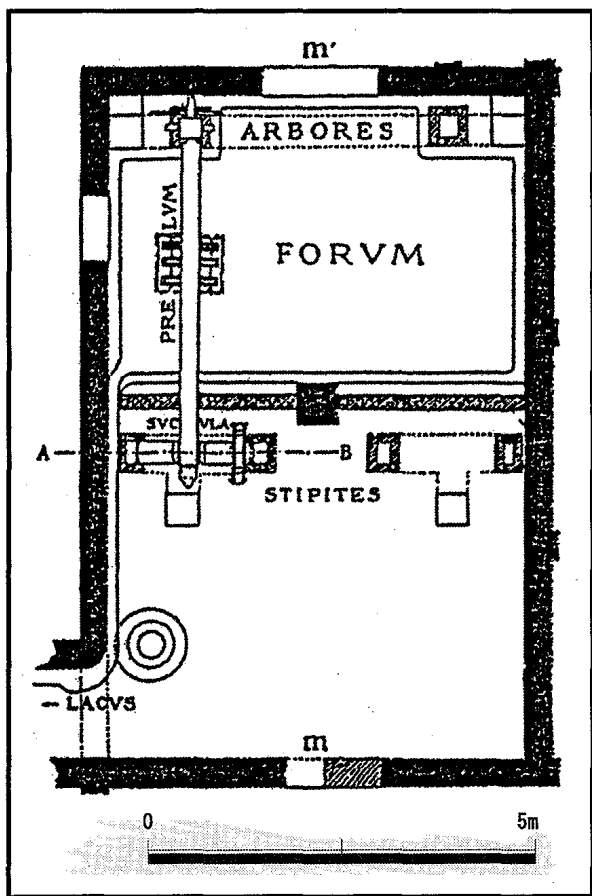
後 79 年当時の
海岸線

付図 VIII. 79 年噴火以前のポンペイの海岸線

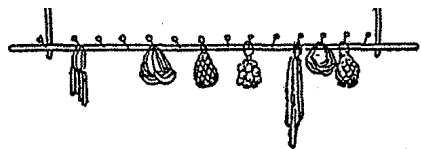


付図 IX. 葡萄酒製造工程 1

古代イタリア都市ポンペイの発掘・学術調査15年



付図 X. 葡萄酒製造工程 2



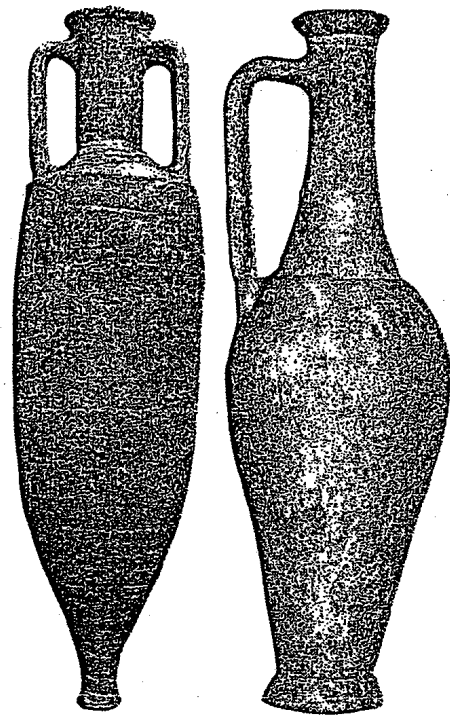
五九 (四一七)



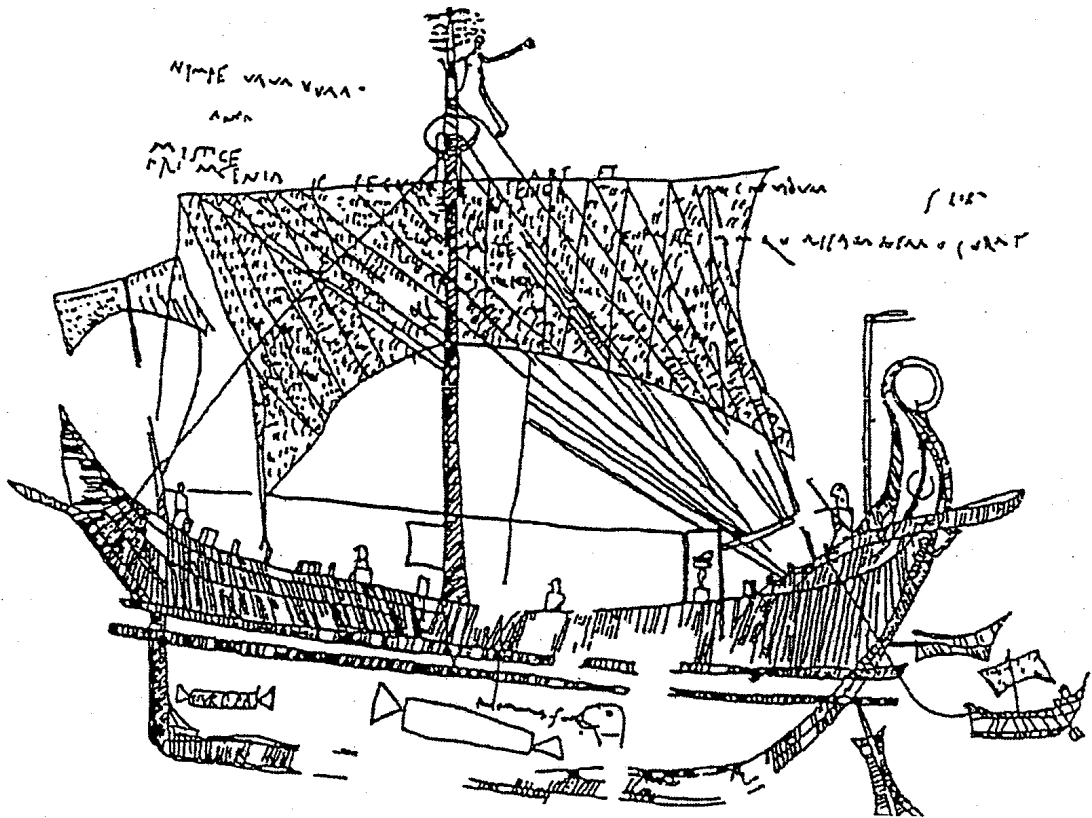
付図 XI. タベルナ飲食店の光景



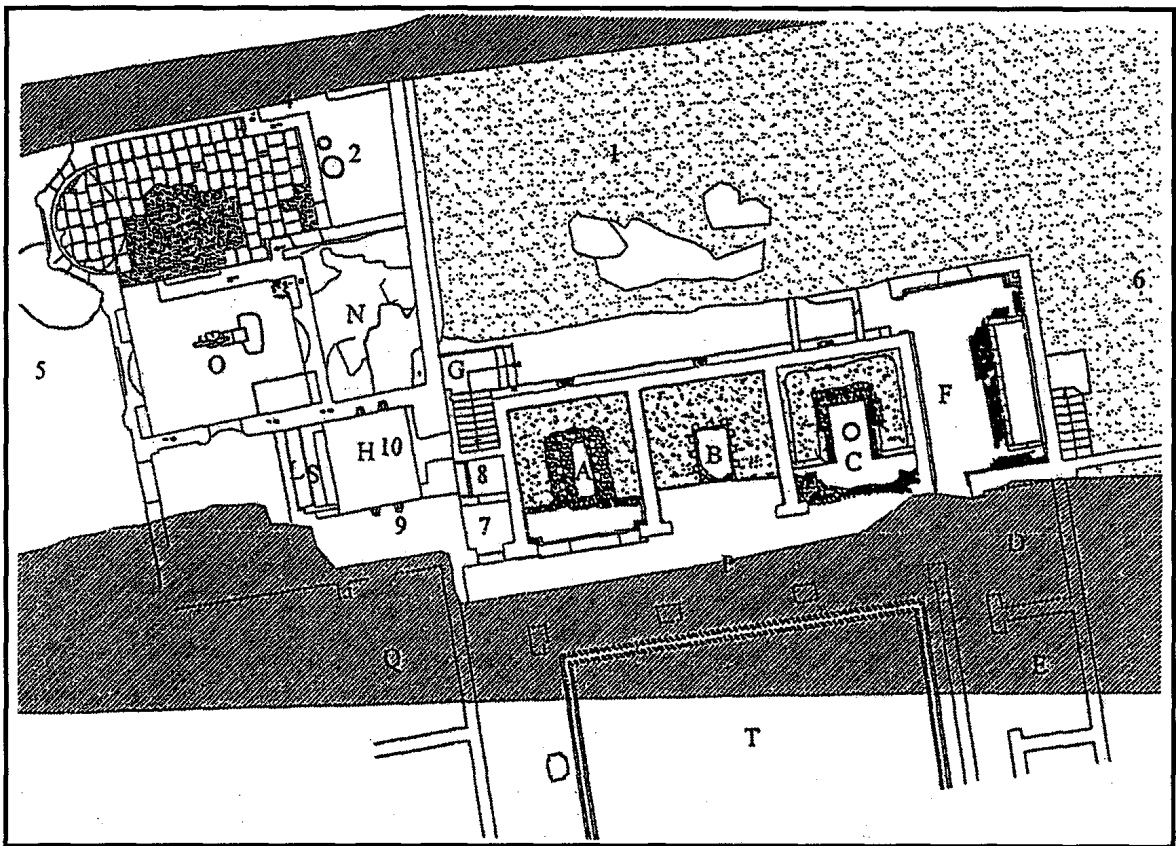
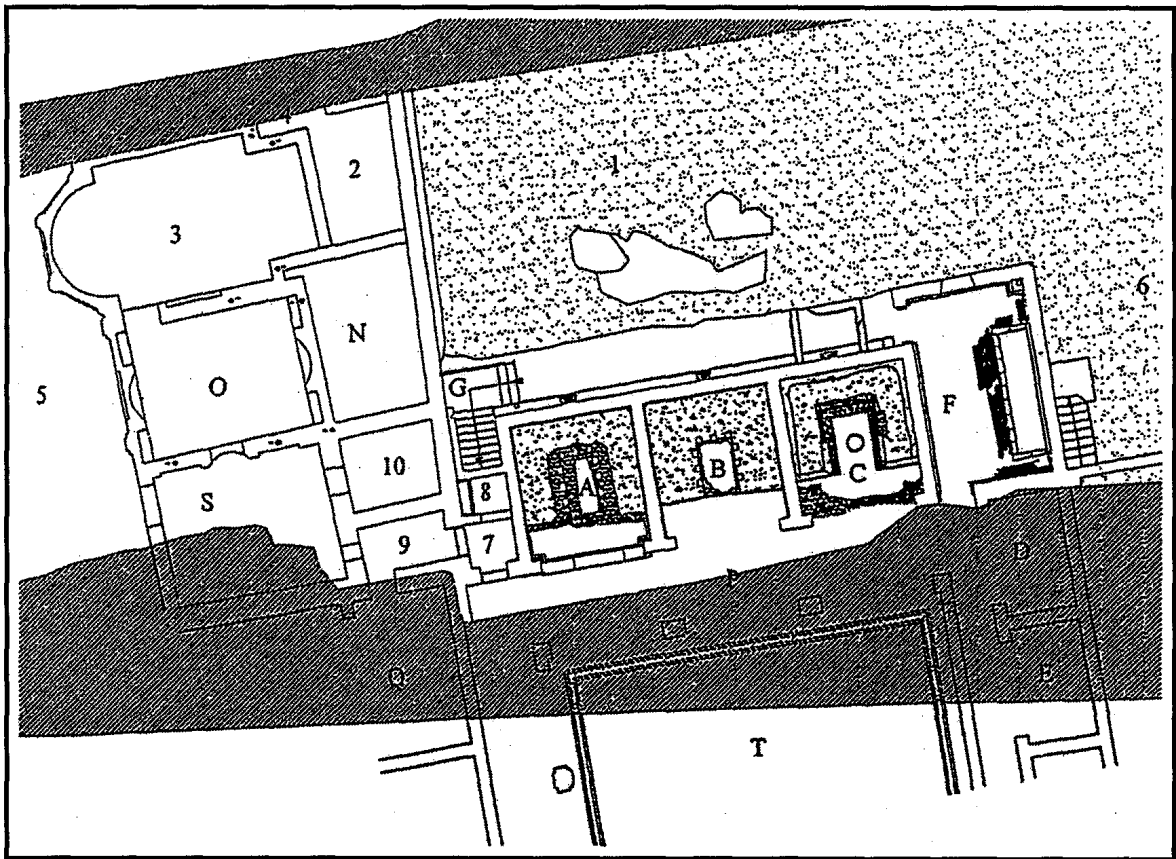
付図 XII. 皮袋車



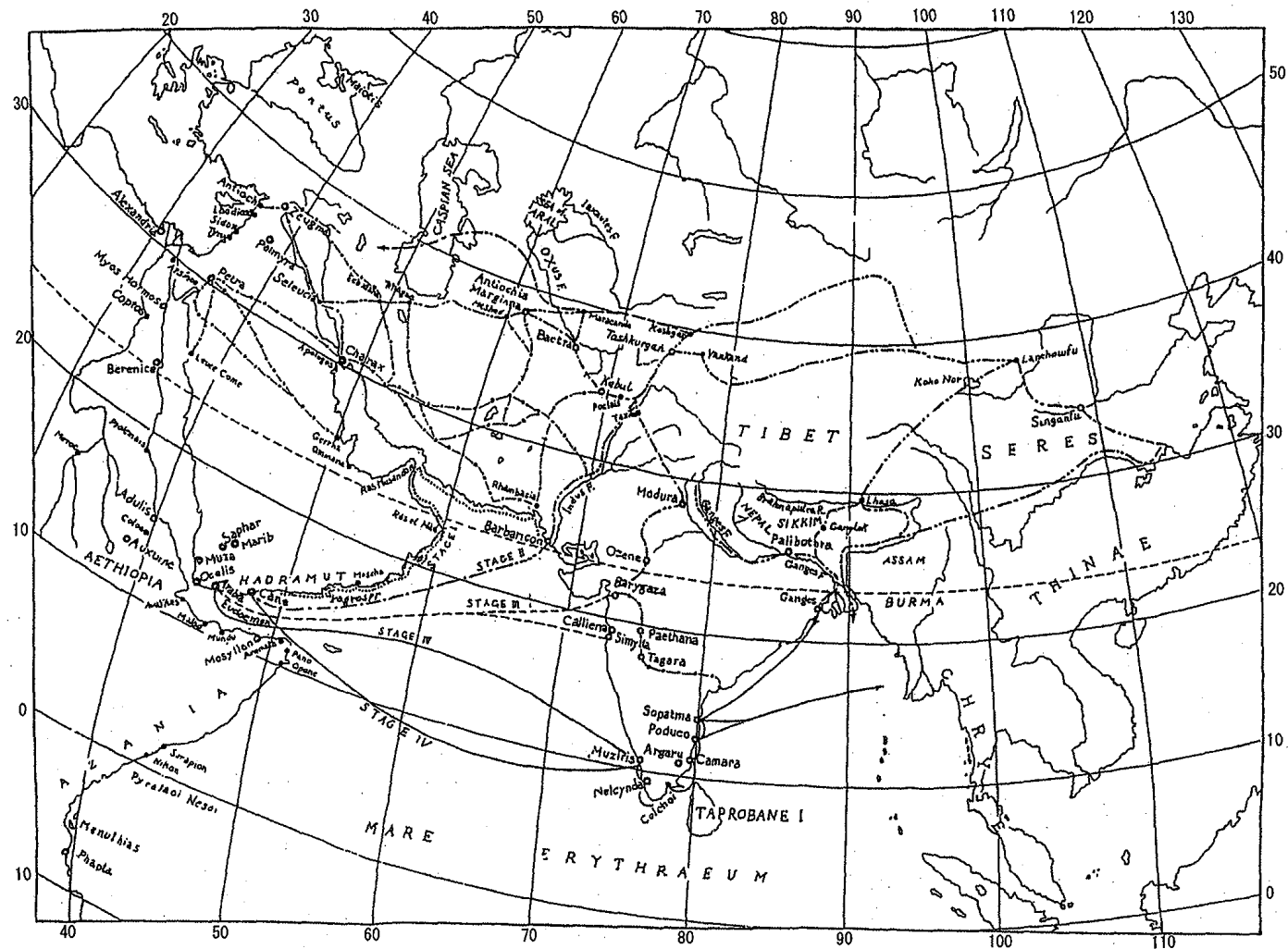
付図 XIII. アンフォラ
(左：船荷用；右：貯蔵用)



付図 XIV. 交易船 (「エウローパの船の家」I.15.3 掻画)

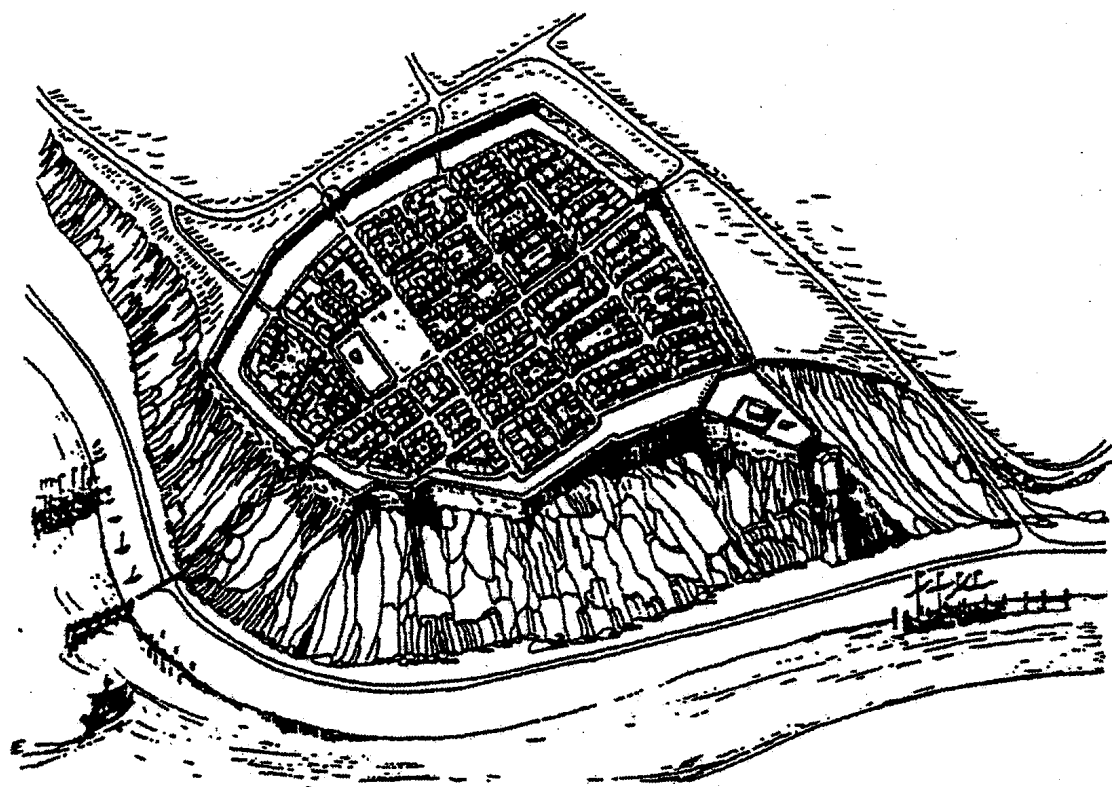
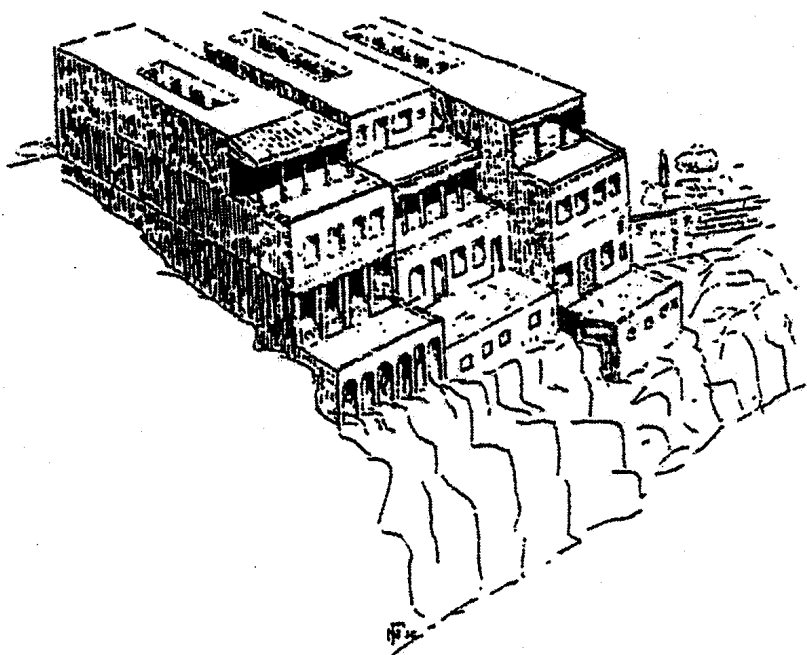


付図 XV. モレヅジネ出土食堂の別荘平面図（上：後 79 年以前；下：後 79 年以後）



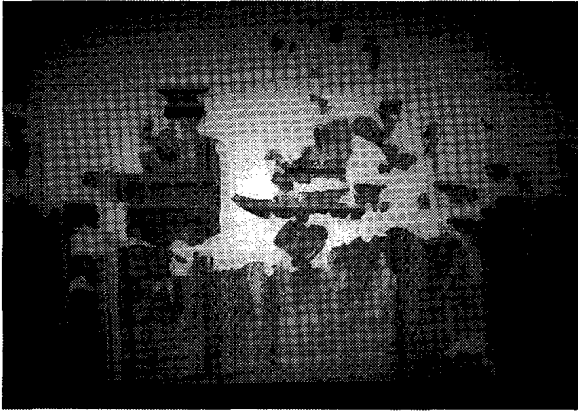
付図 XVI. 海のシルクロード

古代イタリア都市ポンペイの発掘・学術調査15年

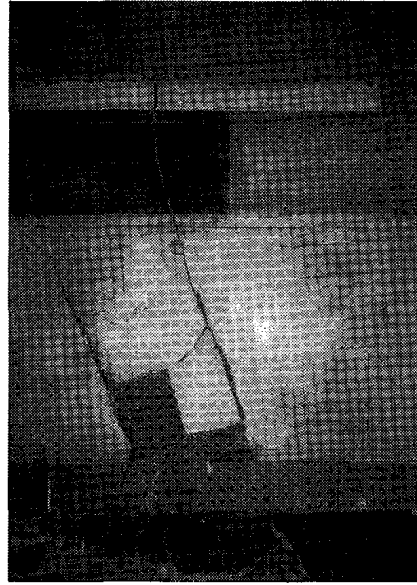


六三 (四三二)

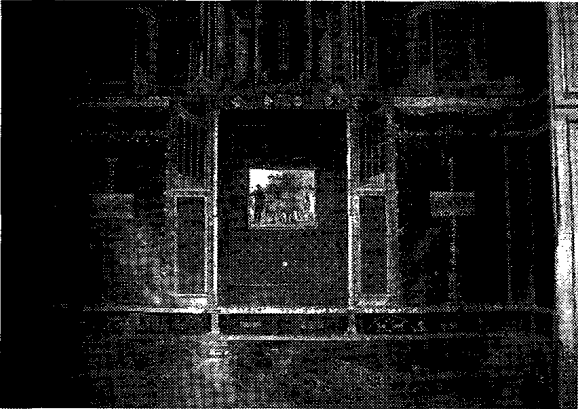
付図 XVII. ポンペイ“古都市”景観図



図版4. 第二様式 テルツイーニョ 別荘6, 東壁 (オリエント風の服装に注意)。



図版1. 第一様式 ファウヌスの家 (VI, 12, 2-5), 寝室。



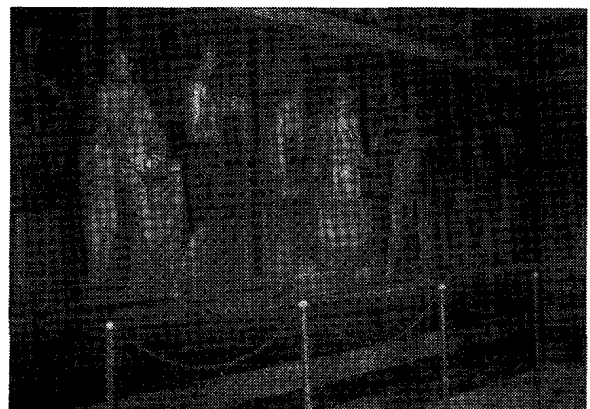
図版5. 第三様式 M・ルクレティウス=フロントの家 (V, 4, a), 執務室。



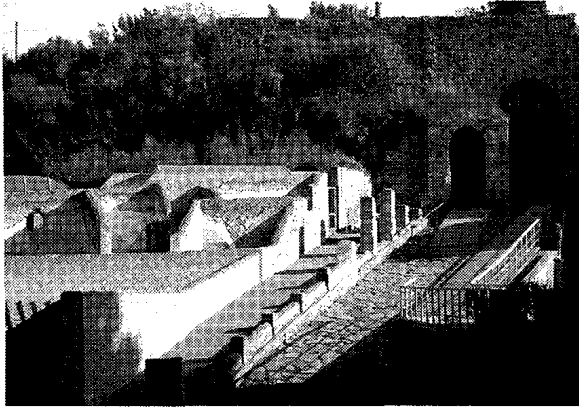
図版2. 第二様式 秘儀荘, 寝室。



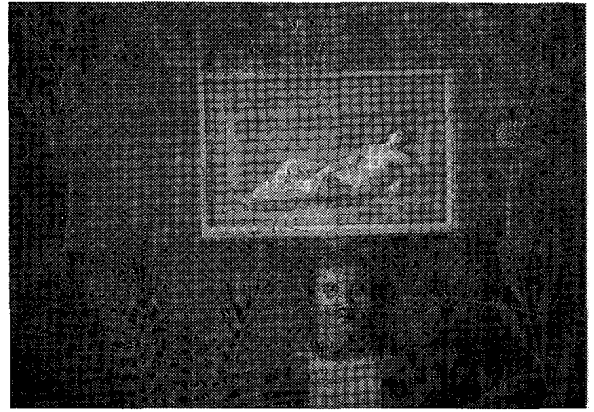
図版6. 第三様式 貝殻のウェヌスの家 (II, 3, 3), ペリステユリウム。



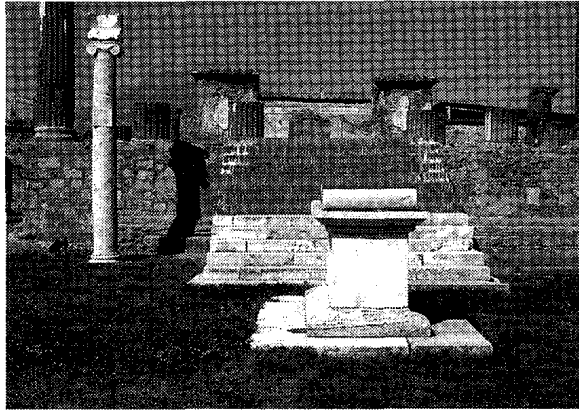
図版3. 第二様式 秘儀荘, 秘儀の間。



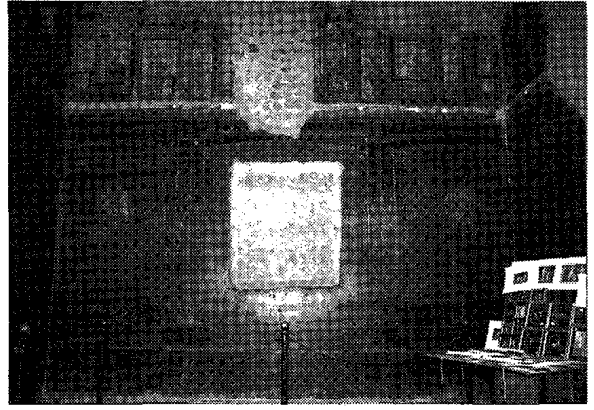
図版 10. 海の間 (一部人道と車道の区別あり)。



図版 7. 第三様式 黄金の腕輪の家 (VI,17 [西街区], 42)。



図版 11. アポロ神殿 (前6世紀末創建, その後再建, 補修される)。



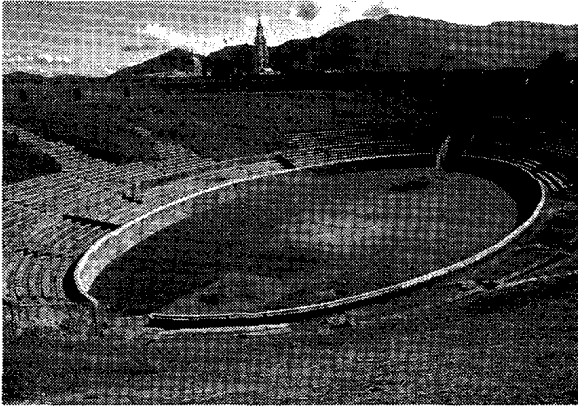
図版 8. 第四様式 ウェットイの家 (VI, 15, 1), オエクス。



図版 12. バシリカ (前120-78年頃建設, はじめは市場として, 後1世紀には法廷として使用)。



図版 9. 第四様式 M・ファビウス＝ルフスの家 (VII, 16 [西街区], 19), 部屋 58, 東壁。



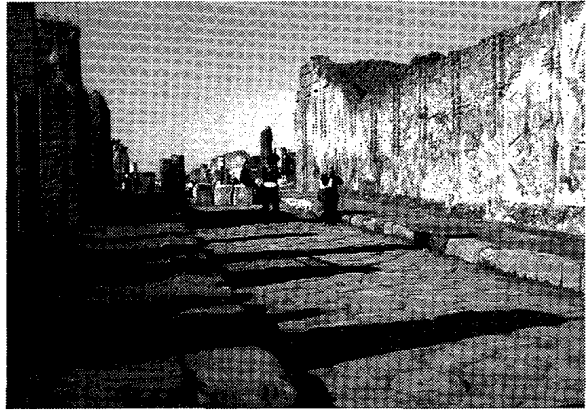
図版 16. 円形闘技場。今日残っているローマ世界最古の闘技場。前 80 年頃建設。2 万人の観客を収容。



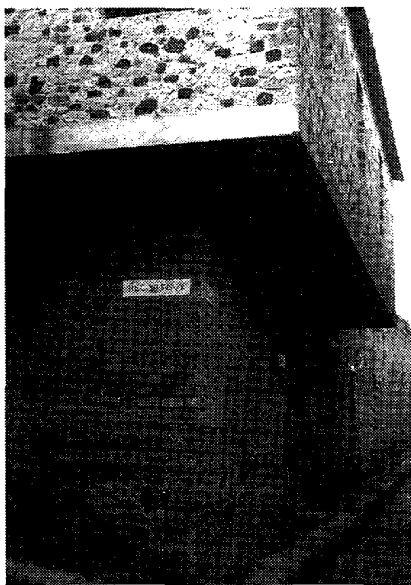
図版 13. フォルム（公共広場）。ポンペイの政治・経済・宗教などの市民生活の中心。38×157 メートル。



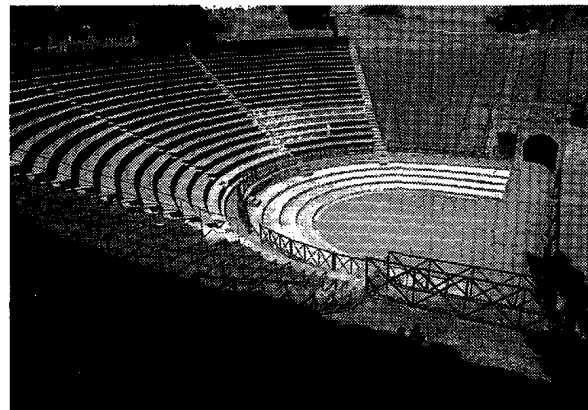
図版 17. スタビア浴場。前 2 世紀に創設。ポンペイ最古の公共浴場。前 80 年に改築される。



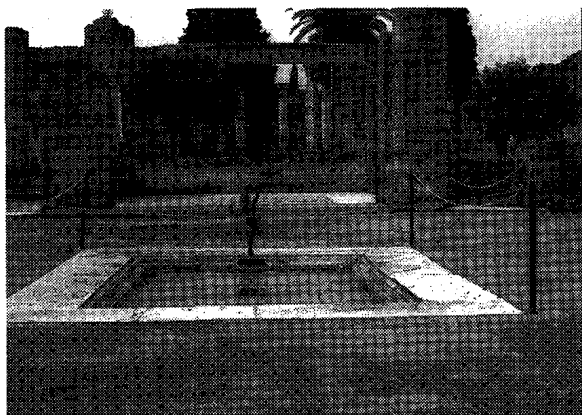
図版 14. アッボンダンツァ通り。ポンペイの主要道路。車道と歩道が区別され、歩行者が足をぬらさぬよう、歩道間に飛石が敷かれている。



図版 18. 娼婦の館 (VII, 12, 18)。一階は 5 部屋あり、階下各部屋の上には性技の図が描かれている。



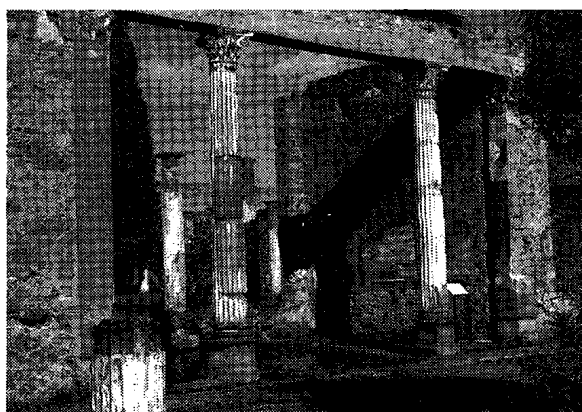
図版 15. 大劇場。前 2 世紀の建設。アウグストゥス時代に改築。収容人数は約 5 千人。



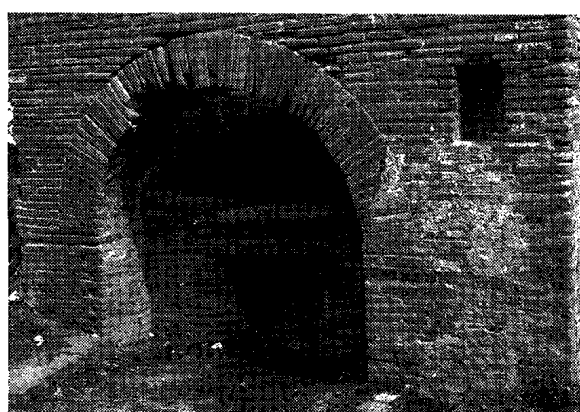
図版 21.



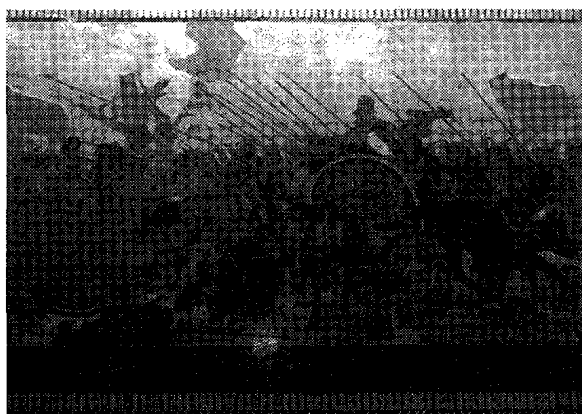
図版 19.



図版 22.



図版 20.



図版 23.

図版 19-20. パン焼窯の家 (VII, 2, 22)。パン製造はポンペイの主要な産業の一つ。巨大な四つの挽臼に注目。

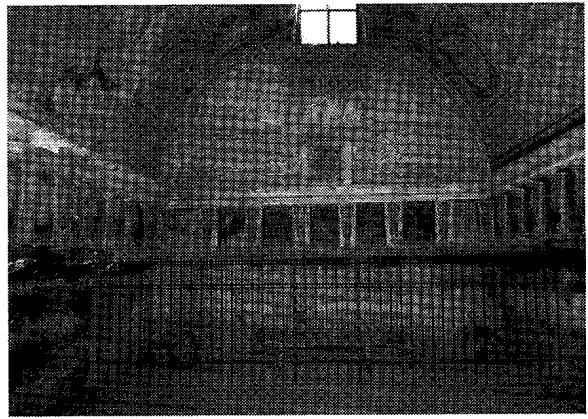


図版 24.

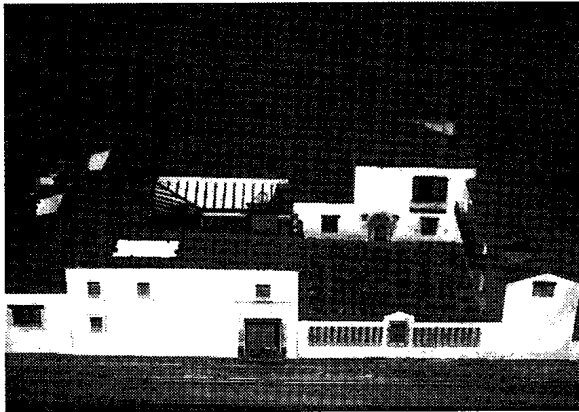
図版 21-24. ファウヌスの家 (VI, 12, 2-5)。ポンペイの第一様式を代表するアトリウム—ペリスティウム形式の豪邸。山の精ファウヌス青銅製立像（複製。オリジナルはナポリ考古学博物館所蔵）のあるアトリウム。その奥は主人の執務屋。さらにその奥に位置するエクセドラ（図 22）からアレクサンドロス大王のイッソスの戦いを描いたモザイク（図 23）が出土（現在はナポリ考古学博物館所蔵）。さらにその奥は広々としたペリスティウム（周柱廊中庭, 図 24）が続く。



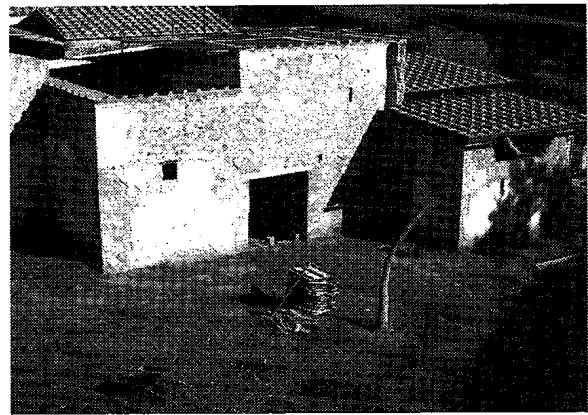
図版 26. ポンペイ郊外モレッジネ地区出土の建造物A（食堂の別荘 Villa dei triclini）、トリクリニウムA，北壁。豎琴を弾くアポッロ。第四様式。



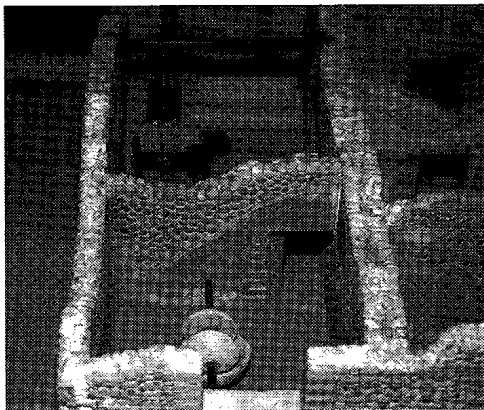
図版 25. フォルムの浴場。脱衣室，微温浴室，高温浴室，冷水浴室が並ぶ。図は中央の微温浴室。周囲の棚は所持品置き場。



図版 29. ルキウス=カエキリウス=ユクンドゥスの農園別荘模型。これはローマ郊外のエウルにあるローマ文明博物館に陳列されている。農園面積は100ユゲラ（約25ヘクタール）と推定される。土間に84個のドーリウム（壺）が埋められ，最も典型的な農園別荘といわれている。



図版 27. ポンペイ近郊にあるボスコレーレ，ヴィッラーレジーナにある小規模農園別荘。1978-1980年，S. デ=カーロにより発掘。遺構は屋根によって覆われている。



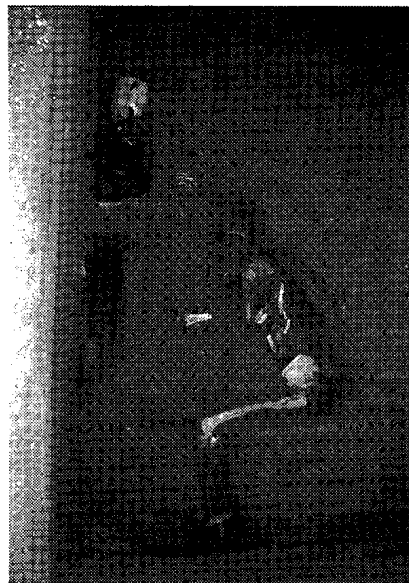
図版 30. ルキウス=カエキリウス=ユクンドゥスの農園別荘オリーブ油搾汁室模型。ボスコレーレ，ヴィッラーレジーナ考古博物館に陳列されている。



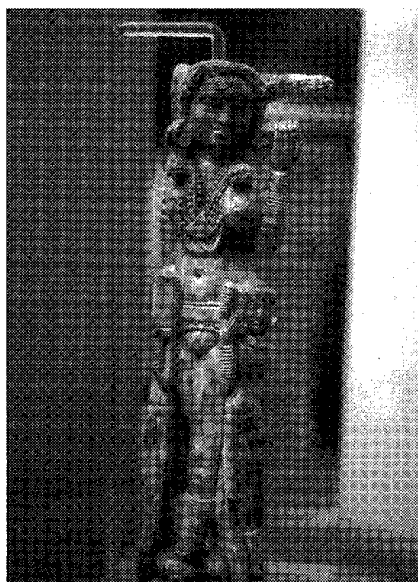
図版 28. ヴィッラーレジーナ農園別荘の葡萄酒発酵室。18個のドーリウム（壺）が並べられている。葡萄酒貯蔵容量から計算して，農園の規模は約7.07ユゲラ（1ユゲラは1/4ヘクタール）と推定されている。



図版 32. 人骨の石膏鋳型作成（左から江谷調査主任，坂井調査員，筆者）。



図版 31. 古代学研究所調査隊による二体の人骨の発見。



図版 34. ポンペイ (I. 8. 5) 出土のインド産象牙細工ラクシュミー女神像。ナポリ考古学博物館所蔵。



図版 33. 百年祭の家 (IX. 8. 6) 出土の床面モザイク。住宅所有者は葡萄酒交易を生業としていたと思われる。

付図および図版の典拠

写真図版は全て筆者の撮影による。図版4および33に
関しては二〇〇六から二〇〇七年にかけて大阪のサント
リーミュージアム天保山で開催された展覧会『ポンペイ
の輝き』、また図版7に関しては二〇〇一から二〇〇二
年にかけて神戸市立博物館で開催された展覧会『世界遺
産ポンペイ展』の会場にて撮影した。許可等の便宜をお
はかり頂いた関係者に感謝申し上げます。

付図に関しては以下の通り。

付図1 浅香正『古代ローマ都市ポンペイの蘇生』芸艸
堂、一九九五年、挿図。

付図II J.J. Dobbins, & P.W. Foss (ed.), *The World of
Pompeii*, Routledge, 2007, p.436, Fig.28.1.

付図III 浅香正「ポンペイ近郊における出土ウイラの
一覧表とその研究課題」『古代学研究所研究紀要』第四
輯、八七頁、No.57 (オリジナルは S. De Caro, S., *Villa
Rustica in Locarità Villa Regina a Boscoreale*, 1988).

付図IV 浅香正「ポンペイ近郊における出土ウイラの
一覧表とその研究課題」『古代学研究所研究紀要』第四
輯、六四頁、No.13 (オリジナルは A. Mau, *Pompeii, its
Life and Art*, NY.1982 (repr.), Plan IV).

付図V Soprintendenza Archeologica di Pompei (ed.),
*Casaldi di ieri Casaldi di oggi: Architetture rurali e tec-
niche agricole nel territorio di Pompei e Stabiae, II Setti-
mana per la Cultura*, 1999, p.76.

付図VI 平面図:『ポンペイの輝き』展覧会図録、二〇
〇六年、六八頁。俯瞰図: *Casaldi di ieri Casaldi di
oggi: Architetture rurali e tecniche agricole nel territorio
di Pompei e Stabiae, II Settimana per la Cultura*, 1999, p.81.
付図VII A. De Simone & S.C. Nappo, *Misì Sarni Opes*,
Denaro Libri, 2000, pp.142-143.

付図VIII A. Cinque, "La trasgressione versiliana nella
pianta del Sarno (Campania)", in *Geografia Fisica e Di-
namica Quaternaria* 14, 1991, p.64.

付図IX *Casaldi di ieri Casaldi di oggi: Architetture ru-
rali e tecniche agricole nel territorio di Pompei e Stabiae*,
II Settimana per la Cultura, 1999, p.90.

付図X id., p.91.

付図XI A. Mau, *Pompeii, its Life and Art*, NY.1982
(repr.), p.403.

付図XII id., p.403.

付図XIII 特別展『世界遺産ポンペイ最後の日』図録

二〇〇四年、九五頁。

付図 XIV W. F. Jashemski, *The Gardens of Pompeii*, 1979, p.134.

付図 XV *Mitis Sami Oves*, Denaro Libri, 2000, p. 35.

付図 XVI 村川堅太郎『エリュトラー海案内記』生活社、一九四六年、付図 古代東西交通路。

付図 XVII H. Eschebach, "Die städtebauliche Entwicklung des antiken Pompejis", *RM* 17, Erg. H. Heidelberg, 1970.